

---

# そらの読書日記 第一集

竜騎士そら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そららの読書日記 第一集

### 【Nコード】

N9883U

### 【作者名】

竜騎士そらら

### 【あらすじ】

そららが読んだ本について、書評というか感想を書いていきます。ネタバレを含んでいる可能性があるため、未読の方はご注意ください。

現在活動報告にて書いている書評を、読みやすいように連載小説としてまとめたものです。

## その1 「ヴァンダル画廊街の奇跡」

こんにちは、そららです。いつも僕の作品を読んでもくれる人はありがとうございます。そうでない人も、時間があれば是非読んでみてください。

さて、春に向けてなんかなにか新しいことをしてみようと考え、書評を書いてみようかと思いました。

本はけっこう読めます。最近まで受験のため、その量は少なかったのですが、しばらくするとまた増えると思われます。

では、さっそく始めましょう。ネタバレを含む可能性がありますので、未読の人はご了承ください。

第一回目の今回は「ヴァンダル画廊街の奇跡」（美奈川護／電撃文庫 初版発行：2010年二月十日）

第16回電撃小説大賞＜金賞＞受賞作

はい。いきなりライトノベルです。ライトノベルですが、なかなかおすすめの作品です。

あらすじとしては

統一世界政府がくプロパガンダ撤廃令というものにより、さまざまな芸術を規制した世界。そんな状況の下、世界各地で壁面に封印された名画が描き出される事件が次々に発生する。『芸術に、その自由を！』という言葉と共に……。

芸術が規制された世界というと、映画『リベリオン』や小説『華氏451度』のようなディストピアな世界かなと想像しましたが、この作品で規制しているのは、芸術全てではなく、戦前の作品に限っているようです。おそらく『戦争を起こした旧体制を思い起こさせる、または関係する芸術』が規制対象ということのようです。

で、そんな世界で建物の壁面に有名な絵が書かれるんですね。人々はその事件を起こす者を「破壊者<sup>ヴァンダル</sup>」と呼ぶ。果たして、彼らの目的とは？　そういう話です。

作中に出てくる絵画は、いくつかの作中作を除いてすべて実在の有名な作品ですが、それらの絵を知らなくても楽しめるようになっていきます。ちなみに僕は全部知っていました。それくらい有名な絵です。

物語の前半は、ヴァンダルの活動によって人々の失われた絵の記憶や感動を思い出させる、という内容で、ここまで読んだら、この話は連作短編なんだろうな、と思えるような構成です。しかし後から思えば、この部分はヴァンダルのメンバーやインターポールの紹介といったものだった。

そして後半部分。物語が展開し、謎解きが行われます。派手なアクションとかは無いですが、話に引き込まれます。正直、前半部分はちょっとおもしろくないかなと思いましたが、後半はよかったです。その理由としては、前半はヴァンダルがなんか脇役っぽい書かれ方をしていたのが、後半になってようやく主役として書かれたから、というのが思い浮かびます。

全体的にかなりおもしろく、おすすめできる作品でした。

と、思いつくままかいてみたのだが、書評ってこれでよいのだろうか？ 単なる感想になっっている気がする。

まあ、しばらくこんなかんじで続けてみます。次からは、ラノベ以外の本も読む予定です。

## その2 「容疑者Xの献身」

そらが読んだ本について、書評というか感想を書いていきます。できるだけネタバレは書かないようにしますが、未読の方はご注意ください。

二回目の今回の作品は「容疑者Xの献身」（東野圭吾／文春文庫）

初版は2008年8月5日ですが、文庫化される前に2005年8月に単行本として出版されており、また初出は文芸誌『オール讀物』に2003年から連載されていたものです。

文庫版は映画化にあわせて作られたんですね。いわゆる「読んでから見るか、見てから読むか」ってやつですね。元ネタもミステリーなので、大きな間違いではないです。文春文庫ではなく角川文庫の話ですが。

話を戻しましょう。映画化された時、僕は本を読む時間はあまりなかったので、宣伝コピーが、名作だとかおもしろいだとか連呼するのを耳にはさみつつ、いつか読んでやろうと思っていた作品でした。

で、内容ですが、ミステリーなのでネタバレには細心の注意を払わねばなりません。さてどうしようか。

位置づけとして、本作はガリレオシリーズの初の長編、だそうです。ガリレオシリーズについては、シリーズ一作目『探偵ガリレオ』だけは読んでました。有名な作品なので説明は不用でしょうが一応しておく、超常現象が起こったとは思えないような手口を使った犯罪について、物理学者がその謎を解くっていう内容です。読んでませんがこの次の作品『予知夢』もそんな内容らしいです。

で、今作。この話は上の二作とは異なり、理科的なトリックは登

場しません。だからシリーズに加えるのは個人的にちょっと抵抗があります。この作品のテーマはどちらかというと、純愛、だと思います。理科では絶対に解くことのできない謎。

話の流れとしては、殺人犯の女性と、それに思いを寄せる数学教師が犯罪を隠し、前述の物理学者と頭脳戦をくりふるげる、といったものです。

感想ですが、犯人が最初から明示してあるため、推理小説の楽しみ方としての犯人当てはできません。しかし謎は存在し、それが解き明かされていく過程は立派なミステリーですし、随所に散りばめられた伏線がまとまっていく様は見事の一言につきます。

ただし、ラストがちょっとすっきりしない終わ리카たのような気がしました。そこは賛否が分かれるような気がします。が、全体的にはいい話だったと思います。

### その3 「メグとセロン? ラリー・ヘップバーンの罠」

今回は再びライトノベルです。「メグとセロン? ラリー・ヘップバーンの罠(時雨沢恵一/電撃文庫 初版:2010年3月10日)」

キノの旅の作者が書く、メグとセロンシリーズの最新作です。一年ぶりの新刊です。

まずは内容から。シリーズ全体のことをお話しますと、メインのキャラクターは六人。彼らは学生で、タイトルに名前のある二人、メグとセロンと、その他六人の所属する新聞部のメンバーが、毎回様々な事件に巻き込まれる、という趣旨で、謎解き要素とかもある、一種のミステリーとしても読める作品です。また、主人公のセロンはヒロインのメグに恋していて、それが進展していく様子も、物語の大筋です。あとは、部員同士でされる会話が軽快で、それも大きな魅力であります。

で、そのシリーズの最新刊。今回は同じく新聞部員で、セロンの親友のラリーがメインのストーリー。隣にモテモテのセロン君がいるため、普段まったくモテない彼が、突然ラブレターを受け取ることから物語は始まります。

ラリーが男らしく、かつこよかった。あと、メグとセロン以外のカップルができそうな伏線があつて、次の巻からも期待できる内容でした。

ただ、この巻だけ見ると、伏線の張りかたがわかりやすすぎて、簡単に先が読めてしまえたのが残念でした。じつはこれはわざとや

っていて、もうひとひねりあるのかなとも勘ぐりましたが、そうでもなかった。次に期待、です。

で、その次ですが、後書きを読むと、次回作は学園キノの新刊らしいです。これが六月ぐらいに出て、キノの旅の新刊が十月にでるのだったら、メグセロの新刊はまた一年後かな。どれも好きなシリーズなので、気長に待つことにします。

#### その4 「長門有希ちゃんの消失 一巻」

多忙のため、しばらく更新が開いていました。忙しいのは今も同じで、読書する時間はあまりありませんが、漫画をいくつか読みました。というわけで、今回から何回かは、漫画シリーズです。

今回の本は、「長門有希ちゃんの消失」（角川書店／ぷよ 初版：2010年2月4日）の第1巻です。

ライトノベル、「涼宮ハルヒの憂鬱」シリーズの外伝的作品で、角川系列の雑誌に連載されていたものですね。映画「涼宮ハルヒの消失」にあわせて描かれた作品です。

作者のぷよさんは、ハルヒの公式パロディ本、というか漫画、「涼宮ハルヒちゃんの憂鬱」の作者で、本作はその番外編ともいえます。

内容としては、消失の世界観とハルヒちゃんの世界観とを混ぜて、長門とキョンでラブコメさせる、というもの。つまり、キョンと長門は文芸部員で、そこにお母さん気質でひたすらしい人の朝倉もいて、長門がキョンのことが好きだがキョンはそれに気付かない、とそういう構図。他に、武闘派の鶴屋さんとみくるも出てきて、そういうキャラクターで物語は進んでいきます。

現在のところ、単なるラブコメですが、それがなかなか面白い。消失長門は、原作では第4巻でしか出てきませんでしたが、けっこう人気があつたのではないかと。僕も好きでした。だから、この長門で話を描いてくれたのはうれしかった。

ちなみに、ハルヒは古泉と一緒に別の高校に通っていることになっているため、あまり出番はありません（ストーリーにからんではきます）。ただ、次の巻から徐々に出番が増えてくるようですね。たぶん、話も大きく動くと思われます。

でも個人的な要望を言うならば、あまり話を展開させないまま、

ラブコメ路線を続けてほしいですね。

というか、原作の新刊はいつ出るのだろうか？ に4月30日発売のザ・スニーカーに一部が先行掲載されるらしいが、まさか3年も待たされるとはおもってなかった。

## その5 「理系の人々 第二巻」

漫画シリーズ第二弾です。今回の本は、「理系の人々 2」（よしたに／中経出版 初版：2010年3月31日）

作者のよしたにさんは、「ぼくオタリーマン」で有名になった方です。タイトル通り、オタクのサラリーマンであるよしたにさん自身の日常を描いた作品です。

そして、今回のこの理系の人々。オタリーマンと趣旨は似ていますが、こちらは理系人間の性質にスポットを当てたネタが中心となつていきます。たとえば

「うまくいかないときの方が集中する」

「CDを30MBぐらいで焼くことに罪悪感を感じる」  
など。

知っている方もいるかもしれませんが、僕も理系の人間です。理系から見て、この本はおもしろい。非常に共感できるいわゆる、「あるある」なネタが多いです。いちばん共感できたのは「平穩が性に合わない」でしょうか。平穩な時間が嫌い。忙しい時が一番充実している。そういうの、すごく理解できる。

……と、なんか個人的な話になってしまいましたが、そういう本です。理系の方もそうでない方も、是非読んでみてください。

## その6 「メイのないしょ、二巻」

知っている人は知っているとありますが、僕ことそらは、シヨタコンです。それはもう重度の。今連載している小説の主人公が小学生の男の子なのは、その理由のひとつに作者の趣味だから、というのがあげられます。それがすべてというわけでもないのですが。そして、シヨタのカテゴリの中でも、女装少年というのは特に魅力を感じるものであります。

さて、そんな僕が今回紹介するのは、「メイのないしょ」（日下皓／富士見書房）。第一巻の初版は、2008年6月9日です。お察しの通り、女装少年ものです。

主人公の名前は春名メイ。彼が女装少年なのですが、物語は彼が全寮制の女子高へ転校することから始まります。そういう状況からラブコメが始まるわけですが、これだけだったらよくある設定ですから、ここは他の似たようなラブコメとは違う点を指摘します。

このタイプの物語としては、女装少年くんは一般に、自分が男であることを隠そうとするものです。ですが、メイは違う。彼は幼いころから女の子として育てられてきたため、自分が男だという自覚がない。つまり、メイは男の子であるにもかかわらず女の子としての行動をとることになります。

この設定はどうか？ いいか悪いかで言うならば、個人的にはちよつと判断をつけにくいです。僕が女装少年を楽しむ要素の一つとして、女装させられて恥じらう仕草というのがあって、その羞恥が最高にかわいいというものですが、それはこの場合完全に欠如することになります。ですが同時に、完全に女の子の行動をする男の子というものに、限りなく魅力を感じるのも事実。

さて、そのほかの点を見ると、この作品は他に多くあるラブコメとあまり差はありません。が、それにしてもメイは可愛い、と、こんな可愛い子が女の子のはずがない、という名言をかみしめつつ思う。本当に、女装少年というのは最高の萌え要素だと思う。

そういうのに興味がない方は別として、ある方には非常にお勧めできる作品です。

## その7 「ほうかご物語 第七巻」

僕の高校には、総合学習という科目がありました。この時間は、普段のお勉強とは違ったことを学ぼう、調べてみよう、という趣旨のものでした。

そこで僕は、一年間ほど、妖怪について調べました。そして、学校の活動なので、調べるために買った本に、経費がついたりもしました。学校のお金で買えた、ということですね。

さて、今回の本は、ライトノベル「ほうかご百物語」（峰守ひろかず／電撃文庫 初版：2010年2月10日）妖怪についてのお話です。

このシリーズの第一巻が発売されたのは、上記の妖怪研究の一年も終わりに近づいて行ったころ。第14回電撃文庫大賞受賞作ということで、おもしろそうだと思い買ってみて、当時その時期に発売されたことを悔やみました。

これが、もう一年早く発売されていたら、これも経費で買えたのに、と。

そういう意味で思い出深い作品ですが、とてもレベルの高い小説だと思います。しかも、シリーズをかさねることに面白くなっている。大賞作家の称号は伊達じゃありません。

さて、内容ですが、シリーズを通したストーリーとしては、主人公の白塚 真一と、化けイタチである伊達クスリ（通称イタチさん）のふたりがメインで、学校内で起こるさまざまな妖怪の起こす事件

に対処していく、というものです。ですが、あんまりシリアスな場面はなく、全体的にほんわかしたムードで物語は進んでいきます。

それで、この物語の最大の魅力は、主人公真一を含めたキャラクター達の変人ぶりだと思います。というか、この見解は譲れませんが、ひたすらイタチさんLOVEで、想いは純粹なのに傍から見れば変態にしか見えない真一をはじめ、主要人物だけではなく、端役に至るまでが変人揃いで、これが実におもしろい。出てくるキャラクタの多い作品ですが、それぞれ個性がまったく埋没していない点からも、それがうかがえます。

そして、このシリーズの第七巻。突然、化けイタチとしての特殊能力を失ってしまったイタチさん。妖怪の起こす怪異に対処できない役立たずになってしまつと落ち込むイタチさんに、真一は決意する「イタチさんは！ 僕が守る！」

最初は真一が一方的にラブコールを叫んでいたのが、巻が進むごとにイタチさんの双方向になってきました。そして、いままでもちから見え隠れしていた敵の正体も明らかに。盛り上がってきています。

で、次の巻。物語が大きく動くそうですが、それってつまりクライマックスが近づいてるのでは、との憶測も流れています。好きなシリーズなので、長く続いてほしいのは山々ですが。とにかく、次巻の発売を心待ちにすることにします。

## その8 「ライ麦畑でつかまえて」

ここしばらく、漫画ばかりについて書いていた気がします。小説をあまり読んでなかったわけです。もちろん、現在進行形で忙しいからですが、原因はそれだけではありません。

この本のせいでもあります。

「ライ麦畑でつかまえて」（J・D・サリンジャー）を読み終わるのに、相当な時間がかかってしまったわけです。

この話の日本語訳はいくつか存在しますが、今回読んだのは野崎孝訳、白水ブックスのものです。初版は1984年5月20日。ちなみに、新しい訳のバージョンとしては、2003年に出版された、村上春樹によるものがあります。そうです。あの1984の村上春樹ですね。

それでこの作品、世界的に有名な話ですが、僕はまだ読んだことがありませんでした。読もうとしたきっかけは、今年の一月の末、作者の訃報を知ったことでした。偉大な作家でしたので、一度その代表作を読んでみよう、と。

主人公の名はホールデン・コールフィールド。彼は成績不振で退学となり、寮を飛び出して実家に帰るまで三日間、ニューヨークを放浪する物語。そこで多くの人と関わっていくのだが、彼らはみなインチキで、愚かで、欺瞞に満ちている。

発表当時から現在に至るまで、若者たちに大きな影響を与えた作品として有名です。大人社会のずるさとか、そういったものを、主人公の攻撃的な口調でこき下ろしていく。そういう内容でした。でしたのですが、個人的な感想を言うと、おもしろくなかった。

ひとつには、訳の問題もあるかもしれない。少し古い本ということもあるし、当時の若者言葉をつかい、事実とは異なると思われる誇張表現や支離滅裂な文体を使用した原本を訳すのは、難しかったのかもしれない。が、読みにくかった。それがこの作品の趣ではあるかもしれないけど、読みにくいものは読みにくかったです。

そして、コルフィールドの行動思想にも、個人的に相いれないものがありました。たしかに大人達はインチキだが、それに反発する主人公はどうかというと、僕は絶対に好きになれない。これは僕の性格的な問題もあるのかもしれないけれど、彼に感情移入することはどうしてもできなかった。

何度も書いていますが、この作品は、大人達のずるさ、インチキさに対する若者の思いを描いた作品です。10代の若者が誰しも味わう疎外感の本質を書いている。でも、僕は共感できなかった。

大人はたしかにずるい、でも、それは無意味なことではないし、そのずるさが誰かを幸せにすることもありえる。そうする必要だつてあるだろうし、正しい、純粋なことをするだけではうまくいかないこともある。周りにインチキな大人がいる、嫌な友人がいる。それならそれで、べつにいいじゃないか。

もしかすると、そう思えるようになるってことが、大人になるってことなのかもしれない。

僕にとっては不向きな作品でしたが、もつと若い人が読めば、もしかすると深く共感できるかもしれない。そういう作品でした。

## その9 「ヨルムンガンド 第一〜七巻」

「ロード・オブ・ウォー」という映画があります。ニコラス・ケイジ扮する武器商人、ユーリ・オルノフが自身の過去を語る、という内容です。このユーリというキャラクターは、複数の実在の武器商人を融合させてつくられたもので、作中で語られるエピソードの大半も事実だ、とのことでした。

戦場や武器の密輸、そして武器商人についてよく知ることのできる、非常におもしろい作品です。

さて、本題。今回の本は、再び漫画です。「ヨルムンガンド（高橋慶太郎／小学館）」の1〜7巻です。第一巻の初版発行は2006年12月20日です。

主人公のヨナは両親を戦争で失い、武器に関する一切を憎む元少年兵。そんな彼が、何の因果か武器商人、ココ・ヘクマティアルとその私兵達と世界中を旅することになる。

ガンアクションもので、硬派なシナリオと隙間に挿入されるコメディパートの両方が秀逸。ファンタジーではないため、登場人物はあくまで現実的。そういう意味では漫画的な嘘というものはない（ただし一部の例外を除く。5、6巻の殺し屋三人組とか）ですが、その硬派さはすごくよかったです。かなりお勧めできる作品です。

上記のあらすじを見る限り、主人公のヨナが話の中心であるかのように読めますね。もちろん、ヨナは主人公として立派に活躍して

いますが、物語の中心はどちらかというとココだと思います。彼女が武器を売る真の理由はなにか。北欧神話に登場する怪物、ヨルムンガンドとはなにを表しているのか。それが物語全体の大きな謎で、それを明らかにするための伏線が随所に張られており、今後の非常に気になる作品であります。

あと、先述の映画に多大に影響を受けていると思われる描写がちらほら見受けられます。6巻のあのシーンとか。ユーリ・オルノフもココ・ヘクマティアルも、どちらも非常に魅力的なキャラクターですので、合わせて観賞してもいいかもしれません。

## その10 「プラナス・ガール 第一、二巻」

前に「メイのないしょ」という漫画を紹介しましたね。女装少年のお話ですが、今回紹介する漫画も女装少年モノです。「プラナス・ガール」（松本トモキノスクエア・エニックス）第一巻の初版発行は、2009年8月22日。

高校の合格発表の日、出会った少女に恋をした。その後、幸運にもその少女とクラスメイトになったが、その彼女の口から驚くべき告白が。

「こう見えても男です！」

主人公の槇と女装少年、藍川 絆のラブコメが物語の中心、というかほぼ全てです。絆以外のヒロインも何人が登場しますが、基本的にはメインのふたりの盛り上げ役か、という印象を受けます。

ラブコメの内容としては、絆がその女の子にしか見えない容姿や男であるという事実を利用して槇をからかう、という日常を描く。これが全て。ですが、ラブコメとして普通におもしろく、女装少年という要素を除いても楽しめます。「メイのないしょ」よりもおすすめです。

「メイ」と同じ女装少年がテーマのこの作品ですが、決定的な違いがあります。それは、メイは自分が男だという自覚が薄いのに対して、絆は男だということを断言しているところです。

メイは、その自覚の無さからの無防備さゆえにアクシデントとい

うか、エロいパートに繋がって、そこが見どころとなるのですが、  
絆はそうではない。男だと自称していることによって、主人公の反  
応に面白みが出てきます。プラナス・ガールは健全なラブコメなの  
で、エロいシーンはありません（メイでは普通にあつた、パンチラ  
シーンも無し）。それで、ストーリーだけでここまでおもしろくで  
きる作者は、偉大だと思います。

## その11 「夏海紗音と不思議な世界 第一巻」

書評の間隔が随分開いていますね。決して、本を読んでいないわけではありません。やらなきゃいけないことが他に山ほどあるからです。忙しさで倒れそうです。

なんて、言い訳ばかりもつまらないので、さっそく書評に入りましょう。「夏海紗音と不思議な世界」(直江ヒロト/富士見ファンタジア文庫 初版発行:2010年1月25日)ライトノベルで、第21回ファンタジア大賞の「読者賞」を受賞した作品です。

まず、読み終わった、というか、読んでいる途中で感じたことをひとことで言おうと思います。たぶん、これを読んだ人の結構な数が、同じ思いを抱いたと思いますが、僕はこう思いました「これ、なんていうハルヒ?」

とにかく、内容の説明に入りますよ。

主人公の一人称で物語は進行します。悠馬という名前の中学生ですが、彼は、まあ平凡な日常を過ごしている、ごく一般的な男の子。その日常が、ある日ひとりの少女との出会いによって壊れていく……と、序盤はよくありそうな展開です。

少女とは、タイトルにある夏海紗音のことですが、彼女にはある特殊な能力が備わっています。それがこの作品のキーワード『指向性万有引力』、通称『夏海引力』で、特定の方向に自分の望む物を、時間や空間、魂や運命すら超越して引き寄せる力です。なんだか、『願望を実現する能力』がちらついて見えます。

紗音のいる世界は、悠馬の世界とはよく似ているが別の、つまりは異世界で、悠馬はなぜか夏海引力によって紗音の世界に引きずり込まれてしまった。元の世界に戻るには、紗音の望みを叶えなければならぬ。それは、太平洋上に浮かぶ幻の島、『虚島』を見つけ

出すこと。

物語の後半は、海洋冒険小説となっています。そこからのストーリーは、王道を行っていて、下手に奇をてらったりすることもなく、素直に冒険小説として読めました。「普通におもしろい」という形容がぴったりかもしれません。萌え要素を削れば、児童文学として通用するかも。元から、萌え要素は少なめですし。

あと、海洋小説なので、船に関する描写が少し詳しいです。が、それは興味のない人にとってはどうでもいいことでしょうし、詳しいからといってそれをよく理解すれば物語の魅力が増すか、といえは、そうではないので、そこはちよつと余計だったかなと思います。

ところでこの本、タイトルの最後に「1」と書いてある、というかこれを書いている翌日に第二巻が発売される予定らしいのですが、それが少し心配です。というのも、この巻自体できれいにまとまっているため、続編の必要がない、というより、書くのが難しと思われるからです。書いても、この巻よりも出来のいい作品にはならない可能性が高い、そう思われます。

まあ、なんにしても買うつもりなので、その感想はまた後日というように。

## その12 「HEROMAN」

僕がマンガとかラノベを買う時、何を基準にしているかというのを、少し話そうかと思います。読んでいるシリーズの新刊だったら、まあ説明は不要ですから、新しい分野を開拓する基準ですね。

といっても、別に難しい話ではありません。相手はマンガやラノベで、こっちはオタク。「萌え」なんて言葉そろそろ古くなっている気もしますが、意味するところはかわりません。

ようするに、ジャケ買いするわけです。表紙の絵柄が気に入ったら、というより、表紙の女の子が好みだったら買おうと思うわけです。もちろん、ストーリーとかも見ますが、やっぱり決め手はビジュアルだな、と。そういうわけです。

さて、今回の本。マンガですが、「HEROMAN」（スタン・リー原作 太田多門作／スクエア・エニックス 初版発行：2010年3月20日）

この作品は、まずは同名のアニメがあり、そのコミカライズであります。で、僕がこの作品を知ったのもアニメを見ることによつてでした。テレビをついたら偶然やっていて、ヒーローマンってネーミングだせえww、とかそういうことを考えながら見ていると、主人公ジョーイが画面に映った瞬間、瞬間……瞬間……

はい、好きになってしまいました。一目ぼれです。ジョーイくんは男の子ですが、いえ、男の子だからこそ好きなんです。シヨタ最高ですね。一見ただけでは女の子に見えるのに、ちゃんとした男の子しているのがレベル高いです。最高です。

……さて、シヨタ語りはこのくらいにして。要するに、これもジャケ買いみたいなもの、ということです。

主人公のジャーイは両親がおらず、祖母と二人暮らし。バイトにより生計を立てている他は、どこにでもいそうなティーンエイジャー。親友がいて好きな女の子がいて、その子の兄貴に目をつけられたり暴力をふるわれたりの日常を過ごしていた。

そんなある日、偶然手に入れたおもちゃのロボットに雷が直撃。そのロボットは巨大化し、ヒーローマンというものとなる。折しもその時、宇宙からスクラッグと名乗る異星人が飛来し地球侵略を開始。日常は音を立て崩壊し、ジャーイはヒーローマンと共に戦いに巻き込まれるのだった。

普通の勧善懲悪もののヒーローアクションです。

どうしてもアニメと比較になってしまいます。マンガ版のジョーイくんも可愛いですが、ストーリーとしてはアニメの方がずつとおもしろい。両方でストーリーの違いはありますし、これからおもしろくなっていくのかもしれませんが、正直、アニメ見ているので十分かな、という気はします。これから期待、ですね。

## その13 「よめせんっ！ 第二巻」

前回、新しいラノベはジャケ買いすると書きましたね。今回のもその類です。「よめせんっ！ 第二巻」（マサト真希／電撃文庫 初版発行：2010年4月15日 ちなみに、第一巻の初版は2009年11月15日です）

タイトルの「よめせん」とは、嫁が千人の略です。なんか最近、似た風なタイトルの付け方をよく目にする気をするのは、あれかとらドラの影響か。

靈感のある高校生、鰹屋広人は、ある日可愛い子猫を拾う。しかし翌朝、その子猫はネコミミの少女となっていた。そして彼に告げる。

「われは、ねこがみ。そなたの氏神です」  
そしてさらに、

「鰹屋の血筋の繁栄のため、そなたに千人の嫁を授けましょう」

ねこがみさまや、それと同時に現れた妖怪少女やその他神様幽霊一般人などのみなさんと過ごす日常を描いたコメディです。ラブコメとはちょっと異なる、普通のコメディですが、それがなかなか面白いです。キャラクターの数は多いですが、それぞれ個性が強いのであまり埋もれることはないです。

そして、おもしろいシーンの中にシリアスなシーンを混ぜて話を展開させていくのですが、物語のまとめかたもうまく、最後は少しほろりとくる展開だったり、話全体として楽しめるシリーズです。

うれしいことに、主人公はがシヨタです。けっこう可愛いですが、可愛いですが、性格は女の子でもヘタレでもなく、むしろ優しさの中に一本筋を通した「漢」なので、かなり好きになれるキャラです。状況に流されながらも言うべきことは言う。この手の話では珍しいタイプではないかと。でも、素敵です。最近読んだ中でも、トップクラスに好きな主人公でした。

## その14 「ヨルムンガンド 第八巻」

前に紹介したヨルムンガンドの最新刊です。発売日に買ってその日のうちに読んだのを、二十日経ってからの書評です。

世界中を旅して武器を売るココ一行。今回の舞台は日本です。と言っても、武器を売るためではありません。武器の販売を妨害する謎の存在。その排除への協力をココの兄、キャスパーから依頼された一行。どうやらそれは、防衛省に所属する秘密組織らしい……。

ココ分隊のメンバーのうち、唯一の日本人であるトージョにスポットが当てられた話です。敵となる部隊も、トージョがかつて所属していたものであります。

外国も皆が皆そこまで治安の悪い、武器を日常的に見かけるような場所ではないと思いますが、やはり日本は平和で、銃やら軍隊やらとは縁遠い国です。戦争をできない軍隊がいるというのも、世界的には珍しいことです。それがこの巻のキーポイントでもあるのですが、そのせいか、この巻のガンアクションは若干控えめな印象を受けました。

その点、ストーリーはよかったです。最後の、敵部隊のリーダーの言葉が重かったです。

そしてこの巻の最後の話。物語の根幹にかかわるような大きな伏線が張られました。次巻から物語が大きく動く……かどうかは分かりませんが、ココの企んでいるらしいこと的一端が見えた。そんな気がしました。

## その15 「R18! 第一、二巻」

マンガです。「R18!」(ぷらば/芳文社)の一、二巻。第一版の発行は2009年1月9日です。タイトルは18禁ですが、内容は全年齢対象です。

ひょんなことから年齢制限ありな美少女ゲームの会社に勤めることになった女の子の日常を描いた四コママンガです。四コマですがストーリーになっている、いわゆる「ストーリー4コマ」というやつです。略してスト4ですね。

主人公は鈴村里佳子さん。お姉さんに勧められて、何も知らずに入った会社がエロゲの製作会社だった……と、要はそれだけのお話です。その会社の人間が、全員が若い女の子だったのはフィクションだからってことにしておいて、彼女達がオタクだったこと以外はことごとく真人間なのはちよつと意外でした。たしかに萌えに対する追及は人並み外れていて、若干百合の気があったりしますが、それはこの手のマンガではよくあること。そして、なにより主人公が一番変態っぽいというのは、少し驚きでした。

こんな会社は実際には存在しないでしょうが、描かれている業界のエピソードは、けっこうリアルなことじゃないかなと思います。そんな業界のことなんてあんまり知らないのです、よくわかりませんが。

裏表紙がまんまエロゲのパッケージみたいで、絵柄もそれっぽいですが前述の通り全年齢対象なので、18歳未満の方も遠慮

なく買いましょう。

ちなみに、僕はエロゲをしたことはないです。が、買う予定はあります。なぜって？ 主人公の弟がシヨタだからです。かなりレベル高いです。一目見た瞬間に買ってやると思いました。男の子めあてで。

ですが、発売延期が重ねられ、なかなか発売されません。当初の予定より七か月も延びているようです。ああ、いつになれば買えるのか……………歩くん大好き……………。

## その16 「HEROMAN 第二巻」

二日続けて更新とか初めてではないでしょうか。今日は前に紹介したマンガの第二巻です。「HEROMAN 2」(太田多門/スクエア・エニックス 初版発行：2010年6月22日)

アニメ版では宇宙人スクラッグはとくに倒され、新たな敵の陰がちらつく中での日常編を今やっている、というような状況です。漫画版でも、この巻には敵を倒して一段落、つかの間の日常的なエピソードが入っています。と言っても敵はあいかわらずスクラッグ。倒したのは先遣隊で、後に本体がやってくるようです。

個人的に、読む前に気になっていたのはジョーイくん………ではなく、ヒロインのリナの兄、ウィルです。彼、アニメ版ではジョーイとヒーローマンの活躍に嫉妬して無茶をしてジョーイ達の足を引っ張る……という立場のキャラでした。まあ、最後に漢を見せて、かっこいいシーンもあったのですが、で、マンガ版では別の扱いされているかなと、それが一番気にかかってました。で、実際どうだったかと言えば、基本的には変わってませんでした。きっと彼には、この後アニメのと同じ運命をたどることが予想されます。とはいえ、マンガでは彼も戦いに参加したり、ジョーイのがんばりを実は認めていたりしているので、アニメ版よりも評価は高くなります。

さて、今後の展開ですが、スクラッグとの戦いは続きそうですが、そうだとしたらアニメと展開が同じ、ということになってしまいます。できれば、もっと違うことをしてほしいですね。そういったこ

とにも注目しつつ、マンガとアニメ、両方を観ていきたいと思いま  
す。

## その17 「ロウきゅーぶ！ 第五巻」

知っての通り、僕はショタコンです。ショタコンですが、ロリコンではない……………はずですが、自分でもそこんどこよくわかってないので、判断がつきかねます。

まあ僕の性癖については置いておいて、今回はやたらロリという面が強調されるラノベを取り上げたいと思います「ロウきゅーぶ！ 第五巻」（蒼山サグ／電撃文庫 初版発行：2010年6月10日）メインのヒロイン五人が、全員小学生というロリコンホイホイな設定です。ロリコンが隠れた主題なわけです。タイトルは、バスケットボール部の日本語の呼称「籠球部」ろうきゅうぶから取っているのですが、たまにロリきゅーぶなんて言われたりします。

ロリの話はここまでにして、内容についてお話ししましょう。

七芝高校に入学した長谷川昂は男子バスケット部に入部するが、部長のロリコン疑惑がきっかけで部活動停止になってしまう。行き場をなくした昂に、叔母が誘ったのは小学校の女子バスケット部の臨時コーチだった。ただでさえ小学生ネタはタブーなのにと戸惑う昂だが、彼女たちが抱える事情を知り、それぞれの想いを守るために積極的に活動を進めていく。

昂は、女の子の気持ちに気がつかない、典型的な鈍感キャラです。バスケットについての情熱は半端なく、コーチとしての力量も申し分ない。要するに、バスケットに尽くしているっていうキャラです。ですが、バスケット部の誰かが危機に直面すると非常に頼りになる人物になります。人の心を掌握し、まとめるのがうまい人間です。また、ここぞ

という場面で漢を見せる、かなりかつこいいキャラでもあります。

内容についてももう少し書きます。基本的に、女の子とキャツキヤウフフなシーンとか、バスケの練習のシーンとかをはさみつつ物語を展開させ、終盤につなげるという話の進め方をします。終盤にはバスケの試合が行われ、それがけっこうおもしろい。スポーツについて詳しくない人でも普通に楽しめるようになっていきます。

で、この第五巻ですが、そろそろ女の子との絡みのシーンが食傷気味になってきたかなと感じてきました。が、それ以外は良かった。終盤はいつものバスケではなく、変則トライアスロンでしたが、こういうのもいいと思いました。

そしてこの巻で個人的に最もうれしかったのが、三巻以降ハブラれ気味だった小学生男子、竹中夏陽くんが出てきたことです。いいですね。彼。シヨタです。ツンツン頭です。大好きです。ちよつとバカっぽいところもいいですね。終盤の彼のかつこよさは、もう最高でした！

……………と、シヨタ語りはほどほどに。帯やあとがきを見ると、この作品のコミック化が決定したようです。これは買いですね。期待します。

そしてこの後アニメ化……なんて展開がちらつきますが、アニメはちよつと望まなくなつてのが僕の正直な想いです。というのも、原作は、ヒロインとのラブコメ的なシーンと、真面目なバスケのシーンがひとつの本にまとまっているからおもしろいのであって、ア

ニメの一話分では、尺的に足りないから、どうかな……ということ  
です。まあ、やるなら絶対に観ますが。とりあえずコミックは買  
います。

## その18 「テルマエ・ロマエ 第一巻」

最近マンガばっか読んでる気がします。ですが、今回のマンガはいつもみたいな萌え萌えしたやつじゃないです。というか、女性がほとんど出てきません。「テルマエ・ロマエ」(ヤマザキマリ/エントーブレイン 初版発行：2009年12月8日)マンガ大賞2010や第14回手塚治虫文化賞短編賞受賞作らしいです。

タイトルの意味は「ローマ人の浴場」その名の通り、作品のキーワードは「風呂」と「ローマ」です。

西暦130年代の古代ローマ、風呂場専門の設計技師ルシウスは、己の良しとする設計案が世間に受け入れられることがなく、半ば失業状態に陥っていた。

そんなある日、彼は出かけた大浴場にて、底に大きな穴を見つける。好奇心からそれに近づいたルシウスは、その穴に吸い込まれ、気がつくとも現代日本の銭湯にワープしていた。

毎回ルシウスが日本の銭湯や露天風呂に飛んで、自身の文化との違いに驚くという内容のギャグマンガとなっております。おもしろい、っというのは笑わせてくれるという意味ではなく、日本の文化を古代ローマ人の視点から見ることによって自分達の文化についてよりよく知る、あるいは再認識することができるという点でもしるい作品でした。

話と話の間に、作者による風呂に関する歴史資料などについて書かれたコラムが掲載されています。こちらも、本編とおなじぐらい

良かったです。

通読して、ギャグや展開を楽しむというよりは、日本やローマの風呂文化についての知識を得ることによって楽しむマンガだと、そう感じました。

## その19 「ストライクウィッチーズ 乙女ノ巻4」

アニメが非常に有名な作品ですね。その第二期の放送が、これを書いている数時間後まで迫っています。地方によってはすでに放送されてる所もあるでしょうが、僕の住んでる地域では今夜の放送なんです。がんばって起きてリアルタイムで観ます。ストライクウィッチーズ。今回の本は、そのノベライズの第四巻です。

ノベライズというと、アニメの内容を文章に書きなおすというものを思い浮かべますが、これはそうではありません。この巻に関しては、完全オリジナルなストーリーです。これまでの三巻も、一、二は半分ぐらいがオリジナルでした。

では話の紹介を。時代設定はちょうど第二次世界大戦のあった頃。ネウロイと呼ばれる謎の物体がどこからともなく地球に飛来。人類を攻撃し始めた。

ネウロイに対し徹底抗戦を決意した人類は、対ネウロイ用の新兵器を開発した。ストライカーユニット。それは、ネウロイに効果的だとされる魔力を増大させ、魔力による飛行を可能にした魔法の水ウキである。

ストライカーユニットというのは、両足に装着することによって空を飛ぶことのできる道具であり、第二次世界大戦中に活躍した実在の戦闘機がモチーフになっています。そして、ストライカーユニットを使用できるのは、魔力を持った魔女<sup>ウィッチ</sup>だけである。ストライクウィッチーズは、そんな魔女達の戦いを描いた物語です。

この巻では、戦いの場面はあまり出てきません。どちらかというと、日常を描いていて、シリアスな展開にはならず、気楽に読むことができます。

ちなみに、僕の好きなキャラはカールスラント（我々の世界でドイツに相当する国）出身のWエースのひとり、エーリカ・ハルトマンです。ボーイッシュな外見と貧乳がたまらないです。しかも強い。そして普段の生活では非常にずばらというのもいいです。好きです。そしてこの巻は、ハルトマンの出番が多いです。これがなによりうれしかった。あと、サーニャとエイラのふたりも多く出てきました。

ところで、この「乙女ノ巻」シリーズの他に、「いらん子中隊シリーズ」というのがあります。これはアニメ版とは違い最初から小説上で展開される物語です。これは一般に小説版と呼ばれています。これも読んだのですが、その書評はまた次回ということに。

## その20 「ストライクウィッチーズ いらん子中隊シリーズ 第二〜三巻」

前回の読書日記で言ってた通り、今回はストライクウィッチーズの小説版（ヤマグチノボル／角川スニーカー文庫 一卷初版：2006年10月1日）です。アニメは、女の子のズボン（パンツではない）がやたら強調された作品となっておりますが、小説版はそんなことはないです。この作品の強調されるべき点は、「百合」です。帯にもこう書いてありますね「これは百合小説ではない。超百合小説だ」

1939年、ネウロイの攻撃により欧州本土が危機に晒されるなか、世界中の軍隊からえりすぐったウィッチを集め、前線に派遣することとなった。扶桑皇国（日本に相当する国）のエース、穴拭智子は激戦区、カールスラントへの派遣、そしてその場での活躍の期待に胸躍らせていた。しかし、彼女が送り込まれたのは欧州最北の辺境スオムスであった。他に送られてきたのも、それぞれの軍隊から追い出されてきたような半人前ばかり。そんな彼女たちの寄せ集め集団「いらん子中隊」こと「スオムス義勇独立飛行中隊」は、様々な問題を抱えながらもネウロイの脅威に立ち向っていく。

要するに、寄せ集めの部隊が活躍するというお話。主人公は智子さんです。扶桑の軍人に、もうひとり追水ハルカというのがいて、ふたりの立ち位置がアニメの宮藤と坂本少佐と重なるために初見ではハルカの方が主人公っぽい印象も受けますが、違います。ラノベ的には割と大人なイメージのキャラが主人公なのですが、彼女の性

格がわりと頑固なので、主人公としての振る舞いに違和感がないのが良かったです。智子の成長の物語としても読めます。

あと、アニメ版もそうでしたが、戦争の描写がちゃんとしていたのはうれしかった。ストライカーユニットという妙なものを作りながらも、それを実際の戦争にうまく当てはめていました。

しかし、この百合というのは好きになれせんね。ラノベだから、女の子が多く出てくるのが正しいのだとしても、個人的には好きじゃないです。男も出すべきです。とくに二巻のあのキャラ。展開は読めてましたが、ちょっと………となってしまいました。それだけが残念でしたね。

## その21 「天然あるみにゅーむ 第一、二巻」

僕がメインで書いてる小説のタイトルや、その主人公のあだ名からなんとなく察することができるかもしれないませんが、僕はアルミニウムが好きです。金属、というよりあらゆる原子のなかで一番好きです。アルミ愛してます。

そんな僕がタイトルだけ見て脊髄反射的に買ったマンガがこれ。「天然あるみにゅーむ」（こむそう／芳文社）一巻の初版は、2009年3月13日です。主人公の名前が「あるみ」なんです。あだ名じゃなくて、本名があるみ。この名前うらやましいです。ちなみにお姉さんの名前は「すず」です。良いですね。

内容は、一言でいえば田舎の女子高拳法部の日常ってところでしょ。うか。いつか紹介したR18！ もそうですが、この手の四コマ作品というのはどうしてもキャラの日常をもしろく描くものになっってしまう。おもしろいからいいのですが。有名な「らきすた」や「けいおん！」もそんな趣旨の作品なんじゃないでしょうか。どっちもあんまり読んでないので詳しいことは言えませんが。

根っからの天然キャラのあるみや、外人金髪美女のマリーなど、キャラの特徴がはつきりしているために、出てくるキャラは多いですが混同してしまうことはないです。ちなみに、僕はツンデレの真貴さんが好きです。でも、あるみの方が好きです。あるみ可愛い。

話としておもしろいかという視点から見ると、けっこうおもしろいと僕は思います。まあ、こういう萌え四コマにしては、という枕

詞がつきますけど。でも、気がつけばなんとなく笑っている。そういうおもしろみがある作品です。

## その22 「もやしもん 第九巻」

世にも珍しい（といっても有名な作品なのですが）「菌」がテーマのマンガの最新刊です。「もやしもん」（石川雅之／講談社 初版発行：2010年7月6日）ちなみに第一巻の初版は2005年5月23日。

アニメ化されていて、今現在実写ドラマが絶賛放送中なほど有名なこの作品について、内容を紹介する必要があるかどうか少し迷いますが、簡単に説明しましょう。舞台は東京にある某農業大学（名前を伏せているのではなく、本当にこういう名前って設定らしいです）。そこに入学したのが沢木 惣右衛門 直保（さわき そうえもん ただやす ミドルネーム？）という田舎者。実は彼、菌やウイルスを肉眼で見ることができ、会話もできるという能力の持ち主だった。直保は大学で出会った人間と共に、その能力を使いつつ菌やそのもたらす効果について学んでいく。

第八巻は一冊丸ごと「ビール編」でしたが、この巻は特に一貫したテーマがあるわけではなかったです。農業の問題と漬物、日本酒造りの序章といったところでしょうか。農業に関しては、自給率の話がおもしろかったです。自給率が低いことは実はなんら問題がない、そういう内容でした。一読の価値があります。

で、実写ドラマが放送中ですね。僕は観ていませんが、キャストがけっこう話題になっていました。特に先輩二人組の片割れ、里美

さんが。本人にしか見えないというレベルの高さです。

他に注目すべきキャストとしては、主人公の直保が中村優一さん。仮面ライダー響鬼と電王に出演していて、その両方でライダーに変身したという、他に例の無いことをした方です。

院生の長谷川さんを演じるのが加藤夏希さん。仮面ライダー龍騎の劇場版に出てくる初の女性ライダー、仮面ライダーファムを演じた方です。

……と、なぜか特撮語りになっていますが、登場する菌もかわいらしく、彼（？）らが実写化されたというのは嬉しいものがあります。僕が観ていないというのは、単に放送時期を知らなかったためです。なので、これから観るかもしれないです。

## その23 「七花、時跳び！」

大学のテストも終わったので今回は少し語ります。なんについて語るのかといえば、そうです。タイムパラドックスについてです。

タイムトラベル、それは人類にとって長年の夢のひとつでしょう。実現の可能性はさておき、目の前にタイムマシンがあれば乗ってみたくなるものです。

ところでタイムトラベルという行為について、どうしてもつきまとう問題が存在します。タイムパラドックスというもので、タイムトラベルで過去へ行ったとして、その過去でした行動が現在に影響を与えるというものです。例えば過去である人物を殺せば、現在に戻ってみるとその人物の存在はなくなっている、という類の現象です。タイムトラベルを扱った作品では、多くこの現象が扱われています。多いのが、過去でなにかやってしまったためにタイムトラベラー自身の存在が消えかけてしまうというものです。

そんなタイムパラドックスですが、論理的に説明できない現象を起こしてしまうこともあります。親殺しのタイムパラドックスと呼ばれるものです。過去に跳んで自分の親を殺したとする。そうすると自分が生まれなくなる。しかし自分が生まれないとすると、親を殺す存在がいらないことになる。ということは自分は生まれるわけだが………という無限ループが発生することになります。これを実際にやるとどうなるのか。それは誰にもわからないことです。上記のような、過去での行為によって自分の存在が消えてしまうというのも、親殺しと同じ状況と言えます。自分が消えるのであれば過去が変わることもないからです。

では、そんなパラドックスに関わることを実際にやってみたらどうなるのか。この小説ではそれにた対する考察をしています。「七花、時跳び！」（久住四季／電撃文庫 初版発行：2010年5月10日）タイムトラベルものですが、あんまりスケール大きくないです。大昔に行ったりとかしません。行くのは、15分前とかです。

主人公の柊は、まあ日常に対してやる気のない奴で、未来研究会なる名前の部を作って非日常なおもしろいものがないかと探している。そういう人間です。未来研究会には後輩の部員がいて、それがタイトルのある七花さんです。ある日、七花にタイムトラベルをする能力があるとわかってから柊は大喜び。好奇心の赴くまま時間を跳ばうとする柊と、惚れた弱みにつけこまれ振り回される七花のタイムトラベルのお話です。

上に書いたように、トラベルするのは15分前とか一年前とか、ほかの同じテーマの作品と比べれば比較的近い時間軸への移動です。しかもその理由が割とバカバカしい。でもそれが面白みを生んでいます。タイムパラドックスについての考察や結論もでていて、その点もおもしろかったです。まあそれは、SFについてある程度知っている人間にとっては結構普通の答えだったりしますが、ひとひねり入れてあって、恋愛要素とかも入っていておもしろかったです。

評価の高い、おすすめの作品です。

## その24 「学園キノ 第四巻」

発売日に買ってその後すぐに読んだラノベの感想を、忙しさに合わせて今upします。

僕が初めてラノベを買ったのは、高校一年生の終わりの時期でした。学年末テスト最終日の前日の帰り、つまりあと一日分のテスト勉強をしなければならぬ日の帰りに買ったのがあの有名な「涼宮ハルヒの憂鬱」でした。テスト勉強そっちのけで読んだのでした。

その後このシリーズを読み終わり、さて次は何を読もうかということになりました。その時買った本は二冊ありましたね。ひとつは「ぼくのご主人様!？」という、マイナーなシリーズ。もうひとつがこの「学園キノ」でした。「キノの旅」というシリーズがおもしろいらしいとは知っていました。その公式パロディ的な本であるこの作品の存在も同時に知っていました。本編キノの旅からではなくこちらから読み始めた理由は自分でもよくわかりません。しかし、この本がものすごくおもしろかったことは確かです。これと本編キノの旅で、僕のラノベ好きが確定したんだと思います。

そんな思い出深い作品の最新刊です。「学園キノ？」（時雨沢恵一／電撃文庫 初版発行：2010年7月10日）この作者は三つシリーズを持っていて、現在各シリーズが一年に一冊出ています。つまりほぼ一年ぶりの学園キノなわけです。

もともとはキノの旅のパロディ的な位置づけの作品。主な登場人物は全てキノの旅が元になってます。つまり木乃や静といったキャラ

ラが出てくるわけです。木乃は楽しい学園生活を謳歌しつつ、ひとたび魔物が現れ学校内で暴れ出すと謎の美少女ガンファイターライダーキノとなって奴らと戦います。要するに変身ヒーローのお話なんです。

この第四巻では、木乃達がバンドを組んで演奏会に向けて特訓したりします。軽音部を結成するということです。その影でなにやら陰謀めいたものが見え隠れしているのですがあんまり複雑な展開にはなりません。というか、その陰謀の中身もキノの読者なら簡単にわかってしまうようなものです。サラとエリアスが出てきた時点で展開が完全に把握します。それでも楽しめるような構成にしえあるのは、さすがと言う他ないのですが。

で、感想なのですが、正直に言うと第一、二巻に比べると少しおもしろくないかなと思いました。一卷二巻は、読みながら笑いをこらえるのに必死だった覚えがありますが、今回はそれがなかったです。しかしこれは、僕がラノベに対して耐性をつけたからかもしれない。読むものすべておもしろいと感じるか、それとも冷静に評価を下せるか。楽しく生きるためにはどちらが幸せかという問いには答えを出しかねますが、批評ができるようになったのはラノベを読み始めた時からの確かな成長の証だと思います。そういうことを感じさせてくれた本でした。

あ、こんなこと書いていてあれですが、一般的に見たら十分おもしろい本だったと思います。僕の期待のハードルが高かっただけです。あとがきを含めて十分楽しめました。あーでもあとがきも二巻のが一番おもしろかったから……ま、シリーズ通して買うのが正しいということ。

## その25 「ザ・ウォーカー」

大学に入るまで、僕は映画をあんまり観ない生活をしていました。今はというと、けっこう観るようになりました。水曜シアター9的な意味で、ですけど。映画館でやってる最新の映画は、興味はありますけど観に行く時間がないので。下宿で一人暮らしを始めてからは新聞を読まなくなったので、最近の映画にどんなものがあるのかも知らないような状況です。

しかし気になる映画があるというのも真実。その映画のノベライズがあつたので買いました。「ザ・ウォーカー」（脚本：ゲイリー・ウィッタ 翻訳：尾之上浩司／角川文庫 初版発行：2010年5月25日）なぜこの本に興味を持ったのか？これが、「本」に関する話だからです。

舞台は、最終戦争によって荒れ果てた世界。北斗の拳みたいな世界観です。たぶんこうなつた理由も、同じく核戦争なんでしょう。作中ではつきり明言されておらず、主人公の話によると環境破壊が理由（オゾン層の破壊による紫外線の大量照射）とも読みとれるのですが、裏のあらすじに「最終戦争」と書かれているのならそんなんでしょう。というか、理由はどうでもいいんです。ようするに北斗の拳の世界なわけです。オートバイに乗ったチンピラが無力な善人を襲い、略奪したりします。まさに時は世紀末！なわけです。知らない人ごめんなさい。

そんな世界を、ひとりの男が歩いていました。彼の名はイーライ。長い間、西へ西へと歩いていました。目的は、戦火を潜り抜けた一冊の”本”をそれがあるべき場所に届けること。そのために行く手を阻む者は容赦なく排除してきました。彼は”本”の信望者でした。

一方、その世界にも町が存在しました。一見秩序を保っているその町の支配者の名前はカーネギー。彼もまた”本”の信望者で、それを何よりも欲しがっていました。イーライがカーネギーの町を訪れた時、一冊の本をめぐった戦いが起こる。

映画はSFアクションものとして宣伝していましたが、小説ではその表現は難しく、アクションとしては楽しめませんでした。逆にストーリーは良かったと思いました。少し陳腐な展開な気もしましたが、ラストの美しさは良かったです。

文明が崩壊した世界が舞台ですが、文明の名残が登場するのはおもしろかったです。iPodやケンタッキーのお手拭きが物語に関わってきたりします。

本の正体については途中まで読めば簡単に予測がつきます。それはまさに本の王と呼ぶにふさわしいものでしょう。グーテンベルクが活版印刷術を発明して最初に印刷した本。それ以前もそれ以後も世界中の人間の目に触れられてきた本。世界で最も読まれている本。それがどういう運命をたどるのか。それが話の見所です。上に書いたように、ラスト、本の行きつく場所について抱いた感想は「美しい」でした。少し、ずっこけてしまいそうなネタもありましたけど、一読する価値はあると思います。

## その26 「インパラの朝」

この本は、筆者が二年間かけてアジアから中東、アフリカの各地へ旅に出てその様子を書いた紀行文である。筆者は女性で、47カ国を一人で回ったのである。中には治安の悪い国もある。著者の行動力と勇氣には感銘を受けた。

旅に出る理由は、誰にも注目されないような世界各地の『小さな声』を聞くためだという。私達は普段、テレビや新聞などで世界中の状況を知ることができる。しかしそれは、メディア側の都合によって改変された情報化もしれない。真実ではないのかもしれない。この著者のやりたかったのは、そういう偽りの声ではない『真実』を見て、世界に伝えることだろう。それはすばらしい試みだ。

日本から中国に渡りチベット、ネパールを経由して東南アジアへ入る。その後インド、パキスタンを通って中東に入り、通り抜けてアフリカ各国を巡る。684日間かけてこれだけの国を訪ね声を集めた。そこで出会った人間はみんながみんないい人ではない。旅行者からお金を恵んでもらおうと群がってくる子供や、それに惜しげもなくお金をばらまく頭の悪い観光客。詐欺師もいた。発展途上国には、先進国から援助を受けてやっと暮らしていけるような生活を送っているにもかかわらず援助を受けるのが当然という考えが身にしみついているような人間もいた。

発展途上国の援助乞食は自分の生活を良くするための努力をなにもしようとはしなかった。先進国ならば自分達を助けて当然という考えを改めようとしなかった。もちろん、これは先進国の側にも問題がある。先進国は国際社会の中での株を上げるために資金援助の額と人的援助の人数を競い合う。その内容や結果は重視されず、量だけが注目され評価される。その結果、発展途上国の飢えや死亡率は軽減されるだろう。しかし発展途上国が自立する力をつけることもなく、まして先進国の仲間入りを果たす日など永遠に來ない。例

えばそういうことが書かれていた。

他にも色々なことが書かれていた。一つ一つの話が短いために、内容がわかりやすく、でも考えさせるものがあつた。

私が最も印象的に思ったのはジンバブエの話だつた。この国でとんでもない規模のインフレが起こっていたことは知っていた。でも、実際にどんな状況だつたかなんてよく知らなかった。この本によると、現地の貨幣が価値を大幅に落とした状況では現物か米ドルを持っていく人間が最も力を持つという。そして旅行者である著者は米ドルを持っているのである。つまり、少しの出費でとんでもない贅沢ができるということである。それはもちろんいいことではある。しかし貧しい現地人の目に、それはどう映るのか。そういう話だつた。

貧困は大きな問題である。それがしばしば悲劇を生む。そういう話もあつた。しかし、そんな状況でも、たとえ先進国とは違って物が全くないような状況であっても、旅人にを歓迎し、温かく接する人間も多くいた。助け合うのが当然というように、著者に食事をふるまい、楽しそうに同じ時を過ごす。こういう人間の存在に胸が熱くなつた。本当は、人間はこうあるべきなのだ。心からそう思つた。しかしそうあるべき姿であるのを妨げる要因は多い。それは上にあるような、現地人の甘えや先進国の傲慢さ、世間体であり、そして『真実』や『小さな声』を知ることのできない私達の無知でもある。

この本を読み終えて私は思った。私は今まで、世界のことを知らなすぎた。知っているつもりでいるだけだつた。しかしそれではいけないのだ。真実を知る必要がある。もちろん、それは簡単なことではない。私は著者のように世界中を旅できるような状況にない。しかしなにか手段はあるはずだ。真実を知りそれをまわりに伝えることが、世界を平和にする第一歩なのだから。自分にできることをやる。そう考えたのだ。

今回の本は今年の青少年読書感想文全国コンクールの課題図書なので、読書感想文っぽいものを書いてみました。それが上の文章です。1550文字ほどあります。語尾をですます調に変えたり、改行分などを考えれば原稿用紙四枚分ぐらいにはなると思います。この感想文については僕は著作権を主張しません。つまり、これを見ている誰か、読書感想文の宿題めんどくせーとか思っている方々は、上の文章を丸写ししても構わないということです。そのまま提出しちゃってください。ただし、それをするのは自己責任でお願いします。バレても僕は責任を負いませんので。まあ、そういう人がどれくらいこの文章を読んでもるかどうかが自体が疑問なんですけど。

ちなみにこの感想文は、あんまり上出来とは言えないです。文字数を稼ぐのが第一でしたから。心にもないことをたくさん書いてます。読書感想文なんてこんなものです。読んでどう感じようが、当たり障りの無い美辞麗句をならべておけば教師からの受けはいいんです。

ではそろそろ本題に。夏休みの時期になると毎年、書店にその年の課題図書が平積みされるスペースが出現します。これはもう風物詩と言ってもいいでしょう。平積みされるということは、売れるということです。そのために、出版社各位は自社の書が課題図書に選ばれるために多大な努力をしている、らしいです。選考基準が明らかでないため、一部には黒い噂もつきまっています。ここらへんのことは、『課題図書の存立構造』という文章（ネットで検索すれば出てきます）が、興味深いことを書いています。

まあ、そういうのはつきりしないことを憶測で述べても、あまり意味はないでしょう。なのでここからは僕個人の意見を言いたしよう。課題図書に対して言いたいこと、それは「全然おもしろくない！」ということです。課題図書のラインナップを見る限り、読んでみたいと思えるような書籍が皆無なんですね。おもしろそうな本がないんです。たぶん、課題図書というブランドがなければとんでもない低い売上しか出ない。そんな本ばかりなんです。どれもこれも判で押したような”いい話”ばかりで、期待できるものがない。これが小学校低学年向きの本でこういう話をもってくるならまだわかりませんが、高校生向きのにもこのノリであるからたまらない。これらに対して歯が浮くような美辞麗句を並べたてることはできても、読書の楽しさを知ることができません。

大切なのは読書の楽しさを知ってもらうことだと思うんです。本を押しつけて強制的に読めと命令する。そのこと自体は、実は許容できます。しかしそれをするのならば、楽しく読める本を選んでやる義務が出てくるのではないのでしょうか。それを放棄しているのがいただけない。楽しんで読める本というのは、決してマンガやライトノベルの類ではありません。一般書として、十分におもしろい作品はたくさんあります。

私的な話になりますが、僕が高校生の時に読書感想文の宿題が出ました。先生の提示した本の中から選んでそれについての感想を書く、というものでした。ちなみに感想文の長さは2000字以内。感想文全国コンクールの分量は2000字以内ですから、その十分の一の長さでよいわけです。しかし、感想を書くのにはこの程度の長さで十分僕は思います。提示された本もおもしろいものばかりでした。いくつか例を挙げますと

「ホワイトアウト」（真保裕一／新潮社）

「クリムゾンの迷宮」（貴志祐介／角川ホラー文庫）

「星を継ぐもの」（ジェイムズ・P・ホーガン／創元SF文庫）

「アルジャーノンに花束を」(ダニエル・キイス/ハヤカワ文庫)などでした。僕が読んだのは「ガダラの豚」(中島らも/実業之日本社)でした。当時、夢中になって読んでいた記憶があります。しかし、課題図書にはこの手の本がない。

課題図書つてのがおもしろいものではない。そのことは知っていました。しかし読んだことはありません。だから一度読むことにしました。本屋で平積みになっている本で唯一おもしろそうだったのがこの本「インパラの朝」(中村安希/集英社 初版発行:2009年11月18日)でした。

内容は上に書いた通りです。感想は、まあ、少しは楽しめたかなといったものでしょうか。ありきたりな、世界中を旅行して人とふれあう心が温まるうんぬんなお話ではないです。旅をして、出会った人間や情勢や、時には自分自身をさえ冷静に見つめ、観察する。そういう旅でした。この形式は今まで見たことがなく新鮮に思えました。しかし、それ以上のおもしろみはありませんでした。

最後に、個人的にお勧めな旅の本をいくつか。僕が好きなのは、旅先で見かけた変なものにツツコミをいれつつ、毒を吐くタイプですね。「インド怪人紀行」(ゲッツ板谷/角川文庫)これはおもしろかったです。あるいは、西原 理恵子さんの本なども、なかなか面白いです。アジアパー伝のシリーズですね。ところでこの人、最近は「毎日かあさん」(特にアニメ版)の影響でなんかいい人っぽいムードが漂っていて、なんかさびしいです。やっぱりこの人は盛大に毒吐きをしてほしいですね。

それ以外のタイプだと、「河童が覗いたインド」(妹尾河童/新潮文庫)などもおすすすめです。これは穏やかな文体で過激なことはあんまりなかったですが、かなり楽しく読めました。

それにしてもインド人気ですね。やっぱりおもしろい国なんでしょう。世の中には「インドなんて二度と行くか！ボケ！」（さくら 剛ノアルファポリス）なんて本もあるらしいです。これは読んだことないですが、なかなかおもしろそうですね。

## その27 「パタリロ！ 第八四巻」

なんにだって「はじめて」はあるものです。今回のマンガは、僕が最初に読んだマンガです。たぶんそうです。覚えている限りは、これが最初のはずです。そういう意味で、思い出深い作品であり、また非常に好きな作品でもあります。「パタリロ！」（魔夜峯央／花とゆめCOMICS 一巻初版発行：1979年11月）その最新84巻です。

作品の主な舞台は、常春の国マリネラ。その国の国王が主人公です。その名もパタリロ・ド・マリネール8世。齢10歳にして天才的な頭脳を持つ科学者で名探偵で守銭奴。金の亡者でわがままで仕事嫌い。そんなパタリロが周りの人間を巻き込んでドタバタの騒動を巻き起こす。そういうコメディです。そういうお話の中に本格的な推理マンガ風の話が入っていたり時代劇が入っていたり、宇宙人や神が登場したりとまあなんでもありなお話です。読んで理解できない人も多いかもしれませんが。だったら読むべきです。読めばこのおもしろさがわかります。

コメディですが、割とシリアスな話が入っていたりもしますね。上記の推理ものに限らず、MIEやCIAが出てきたりもします。でもおもしろいです。あと、少女マンガというジャンルに分類される作品ですが、女の子はほとんど出てきません。美形の男が大勢出てきたりします。そして同性愛的な展開もあります。僕が同性愛に耐性を持っているのもこの作品のおかげです。あ、でも、僕がシヨタコンなのはまた別の原因があると思われますが。

そしてこの最新刊ですが、やはり充実した内容で満足できるものでした。でも、これは一巻から買うべきシリーズだと思います。そ

れだけの価値はあります。

なんだか買え買えコールばかりの作品紹介になってますね。思ったことをそのまま書くとこうなっちゃいます。でも、本当に名作と言うべきマンガなので、是非読むことをお勧めします。

## その28 「ヴァンダル画廊街の奇跡 第二巻」

この書評の第一回で紹介した本の続刊です。ちなみに、これを読んだのはけっこう前ですが、今までほつとらかしにしていました。ちなみに買ったのは発売日です。ですが、読む暇もあんまりなかったんですね。そういう本です。「ヴァンダル画廊街の奇跡 第二巻」(美奈川護/電撃文庫 初版発行：2010年5月10日)

続刊が出るといっのは結構早い時期から知っていたのですが、発売前は続編の必要があるかどうかは疑問でした。一巻で物語としてきれいに収束していたため、続きが出る必要はなく、むしろ変な方向に物語が進まないかどうか心配だったのです。もし出るとするならば、第一巻の前半のような短編集が続くのを希望していました。

さて、実際に発行され買ってみました。あらすじを見る限り、ストーリーとしての続きがあるようでした。しかし読むと、前半が短編で後半がストーリーになっていて、前作と同じ構成だったために同じように楽しむことができました。これなら問題ないです。

ストーリー部分のページ数が少ないため、話がこの巻では完結していません。また構成上、伏線っぽいものがいくつか見えますが、それが本当に複線かどうかはわかりにくいです。しかし、続きが期待できる話ではあるので、気になる人は読んでみてもいいかもしれません。

## その29 「殿といつしょ 第5巻」

戦国BASARAやら戦国無双やら、名古屋城の開城400周年記念のイケメン武将やらの影響で、去年は歴史ブームだったようです。「歴女」なんて言葉もできました。彼女達はイケメンな戦国武将に夢中になったりその生きざまに憧れたりしたようです。伊達正宗あたりが人気高かったんでしたっけ。片倉景綱とB.L.っぽい展開になったり？ 主従愛がそのままの愛になったり？ とにかく、世の多くの女性が草食系とか言われてる現実の男よりも、ある意味空想上の人間に夢中になっていたわけです。ちなみに、世にたくさんいるオタクの方々は、それより以前に同じことをしていたわけですから、その気持ちはよくわかります。現実の女性なんて二度と好きになるものか。ちなみに、僕は戦国無双の竹中半兵衛が好きです。理由は言わずもがな。シヨタは正義です。

今回の本は、そんな戦国武将が登場するギャグマンガです。「殿といつしょ」(大羽快/メディアファクトリー 一巻初版:2007年9月30日)その最新刊ですが、各巻やってることは変わりません。殿がボケて、家臣が突っ込むのが基本パターンです。

内容をもっと詳しく。変わり者の戦国武将や姫君がおかしなことをして周りがそれに振り回されるのがおかしいということですが、描かれている事象はほとんどが史実に基づいたものです。それをうまくアレンジして笑いにつなげているのは見事です。マイナーな人物や事象も多く登場して、ある意味「正確に」描写されているあたりに作者の力量が感じられます。織田家や上杉家の跡目争いや、あるいは織田信長が浅井長政を討ちその頭蓋骨で杯を作る、なんていう深刻になりがちなエピソードもうまく笑いにつなげています。ア

二メ化もされているので、興味を持ってもいいかもしれません。

ちなみにこの巻の表紙は長宗我部元親です。作中では女装少年な役割ですが、僕はこの子が好きじゃありません。だって、かわいくないじゃないですか。そんなのより、織田信長最高です。これは萌えではなく燃えですが。というか、無双の半兵衛くんが最高です。

### その30 「落花流水 第一〜五巻」

以前に紹介した「R18!」や「天然あるみにゅーむ」や、ちかじか最終話を迎える「けいおん!」とかと同じレベルの萌え四コマです。「落花流水」(真田一輝/芳文社 一巻初版:2006年5月12日)この作品も、先のマンガと内容は同じです。つまり、登場人物はみんな女の子で、特に重大な事件が起こるわけでもない日常が描かれる。マンガとしての優劣は主に女の子のかわいさで決まります。萌え四コマってのはそういうもんです。女の子が普段いる場所が軽音部なのか拳法部なのかエロゲ製作会社なのかのバリエーションで区別されるわけですね。このマンガではそれが弓道部です。

高校の合格発表の日、合格を喜ぶ葉山秋穂は、学校伝統の部員勧誘合戦に巻き込まれる。逃げ延びた先で弓道部長の帆風水夏に出会い、弓道部へと誘われる。水夏に一目惚れした秋穂は弓道部に入部し、関西弁の同級生、草場春河や顧問の霜月真冬と共に学校生活を送ることになる。

とまあ、上のあらすじでわかるかもしれませんが、百合要素が含まれています。でも、そんなことは萌え四コマではよくあることです。水夏さんがモテモテなわけです。あと、三巻から出てくる暁と夕はまるで夫婦です。ごちそうさまです。

で、先ほどマンガとしての優劣は女の子で決まると言いました。このマンガはといいますと、とても良いと思いました。表紙を見て好みだなと思い買ったのですが、期待を裏切らなかつたです。四コママンガとしての出来は微妙ですが、萌え四コマなんてそんなものだから問題なしです。

ちなみに僕は、キャラの中では暁が好きですね。貧乳で一人称が俺です。ボーイツシュっていいですね。好きです。たぶんこれは、僕がシヨタコンなのとなんか関係があるに違いない。

### その31 「メルキオールの惨劇」

ある程度大きな規模を持つ書店に初めて足を踏み入れる。この瞬間の感動は筆舌に尽くしがたいものがあります。圧倒的な物量を持つ本の山を前に立ちつくす感覚といいますが、知識と文化の海に溺れる感覚といいますが、まあ、一般にはあまり理解されなさそうなことかもしれませんが、そういう類の感動を覚えるわけです。

そういう感動を覚えるのは覚えるのですが、買う本はというと普段の書店で買うものと変わらないんですね。真つ先にラノベの棚に向かったりしますし。前から欲しかった本がないか探したりしますし。ふと目についた本を衝動買いしてしまいますし。やることはかわらないですね。

去年の四月、梅田の紀伊國屋で初めて買った本は衝動買いのパターンでした。角川ホラー文庫の「異常快樂殺人」という本です。実在した凶悪犯罪者七人＋αについての小説風ドキュメンタリーで、なんかおもしろそうだと、軽い気持ちで買ってさっそく読み始めたのでした。

それについての感想ですが、期待通りのおもしろさでした。いえ、期待以上かもしれません。しかし、その後に「かなりおすすめです」とか「一度読んでみるべきです」という種類の言葉は絶対に続かない内容でした。そうです。絶対に他人にすすめる本ではありません。最高におもしろい内容であることは確かなのですが、文章があまりにも上手いのです。普通ならそれはよいことですが、この本は違う。作者の、残酷なシーンを残酷に書く技術があまりに高いために、読んでいる途中で何度も目を背けなくなりました。文章でこういう気持ちになったのは、たぶん初めてのことです。

何度も書きますがとてもおもしろい本なので、勇気がある方は読んでみてください。

ある意味でこの作者に惚れてしまったのかもしれませんが。この人の他の著作も読んでみたくまりました。他の著作はすべてフィクションらしいのですが、そのうち一冊を買いました。「メルキオールの惨劇」（平山夢明／ハルキ・ホラー文庫 初版発行：2000年11月18日）

主人公の「俺」（本名は明かされていない。自分のことを「トウエルブ」と呼ぶように指示はしていた）はある男の命令によって「他人の不幸」をコレクションすることを生業としている男。他人の不幸とは不慮の事故や不幸な事件に巻き込まれ死んだ被害者の遺品などを指すと考えればいいです。どういふものかわかりにくいですが、説明もしにくいです。

「俺」の今回の仕事は、自分の息子の首を切り落とした母親についての収集。切られた首は見つかっていない。

その女性は他のふたりの息子と一緒に暮らしているらしい。実際にその様子を目の当たりにした「俺」はその異常さに目を見張るが、なんとか家庭に接近し仕事を進めていく……

期待したような残酷描写は、あんまり出てきませんでした。そこは残念。しかし内容としては、奇妙な魅力のある作品になっています。

決して話の筋で読ませるという物語ではありません。話の目標が明確なわけでもなく、途中でミステリー的な雰囲気がかかっている箇所もありましたが、何が謎なのかがやはりはつきりしない。にもかかわらず、続きが読みたいと思える本でした。

その魅力はやはり、作者の文章にあるのではないのでしょうか。この小説では、全編に言いようの無い「不快感」が漂っていました。これがなぜかおもしろいのです。うまく表現できないのが口惜しいですが、実際読んでみればわかるかもしれません。まあ、この本も

そうオススメできるかどうかはわかりませんが。おもしろいのは確かですね。

## その32 「イエローゲート 第一巻」

ご存じかもしれませんが、僕は下宿をしている大学生です。名古屋在住で大阪出身です。

この土地柄ゆえに僕がただ能天気なだけか、名古屋での生活は楽しいです。が、もちろんいくつか不満もあります。そのひとつが、名古屋で「ちちんぷいぷい」を観られないというものです。

ちちんぷいぷいとは、関西ローカルでお昼の時間に放送している情報番組です。名古屋でいうと、三時からつボイノリオさんがやっている番組にあたるものでしょうか。ちちんぷいぷいのパーソナリティは角淳一という方で、穏やかできれいな大阪弁が聞いていて心地よい、そんな名アナウンサーです。

僕はこの番組が好きなのですが、名古屋ではやってないんですね。ではこの時間帯同じ系列局でなにをやっているのかといいますと、古い水戸黄門の再放送を流しているんですね。

ええ。わかります。水戸黄門おもしろいです。日本人の心だと思います。弥七さん好きです。でもちちんぷいぷいが観たいんです。

というわけで僕の愚痴が一段落したところで今回の本です。「イエローゲート」（森みさノメディアファクトリー 初版発行：2010年6月30日）イエローゲートは直訳してください。黄色い門、そう黄門です。本当に黄門、水戸黄門の話なんです。表紙を見る限り萌え系のマンガにしか見えませんが、実際にはそうですが、でも水戸黄門のお話です。

両親に借金を押し付けられ逃亡された。借金取りに捕まった主人公「銀」は返済の免除と引き換えにある人物の護衛を命じられる。

護衛の対象は一見普通の女の子に見えるが、実はその正体は………

水戸黄門の登場人物を男女を逆にして萌えキャラにしてみた。そういう話です。つまり黄門様と助さん格さんが女性になって、かげろうお銀が男になっています。風車の弥七は男のままですが、なんとヒロインあつかいです。あと、越後屋も男でしたね。あと子連れ狼も出てきました。

水戸黄門なので、葵の御紋を見せつけ「ひかえおろー」なんてシーンもちろんあります、が、それが悪役に対してあんまり効果がないのがちょっと変だとは思いました。全体的にストーリーが平凡なので、物足りなく思う人も多いかもしれません。絵が好みなので、それが残念な作品でした。

### その33 「ストライクウィッチーズ2 ？伝説の魔女達」

ストライクウィッチーズのアニメ二期が終わってしまい、少し意気消沈気味です。1クール限りの楽しみとはわかっていました。しかし良作であったのは事実。世間では萌えオタに媚を売ったパンツアニメと見る人もいるでしょうが、それはただの一面にすぎません。これはれっきとした軍事アニメであり、しかも戦争や兵器というものがある意味これほどに正確に描いた作品はあまりないと思っています。まあ、前提が間違っているのだからいろいろ損をしている感はありませんが。

今回の本はアニメのノベライズ。「ストライクウィッチーズ2 ？伝説の魔女達」(南房秀久/角川スニーカー文庫 初版発行：2010年9月1日) 以前紹介した「乙女の巻」シリーズの続編です。というか、アニメのノベライズ・内容補完の第二シリーズということです。

この巻は七割ぐらいがアニメのノベライズで、のこりがオリジナルストーリーでした。オリジナルストーリーはなかなかおもしろかったです、が、ノベライズ部分がいまいちな印象を受けました。アニメと同じ展開だからつまらないというわけではなく、文章が稚拙な印象を受けました。ネットでも話題になったりしてました。「バーン！ ネウロイは砕け散った」とか、そういう文章が普通にできたりします。

イラストはとてもよかったので、買う価値はあると思います。挿絵を担当しているのが京極しんという方で、とてもかわいらしい絵を描きます。個人的に好きなイラストレーターさんなので、それが

うれしかったです。

表紙は今までと同じ、島田フミカネさん。エイラがとてもイケメンでした。一瞬マルセイユかと思いましたよ。

### その34 「少年メイド 第一〜三巻」

今回の本は、ショタ歓喜なマンガです。「少年メイド」（乙橘／エンターブレイン 一巻初版発行：2008年12月12日）ちなみに掲載雑誌は「comic B's - LOG」といつて、この本が置いてあった棚の雰囲気からBLものの雑誌かと思いましたが、ちがうらしいです。この本も、BLというよりはホームコメディ（疑似家族ではありませんが）という表現が正しいです。登場人物のほとんどが男ですが、まんがタイムきらら系統のマンガの登場人物がほぼ全員女の子なのとおなじ現象でしょう。

母親を亡くして天涯孤独の身となった小学生、小宮千尋は、お金持ちの叔父である鷹取円に引き取られることとなるがそれを拒否する。しかし鷹取邸のあまりのゴミ屋敷ぶりにキレた千尋は屋敷を猛然と掃除し始めた。その様子を見た円はひとつの提案をする。千尋を、鷹取家の「メイド」として雇う、と。

しっかりもののメイドとダメ大人のご主人さまと、その他個性的な人物達が繰り広げるコメディです。絵がうまく、ストーリーもクセがないので、読みやすいです。

千尋のキャラがものすごく僕好みでした。小学生でメイドでツンデレです。ここまでツボなキャラは今までなかった、とすら思えます。あと、メイドですが女装しているわけではなく、メイド服はスカートではなく半ズボンでした。こういう、男の子としてかわいいショタには、安易に女装なんてさせる必要なんてないということを、作者はよくわかってると思います。ええ。最高ですね。

そして、千尋の同級生で親友の日野という少年が出てくるんですけど、彼も好みでした。ああいう、そっけないけど実は友達思いの男の子って、大好きです。

なんだか、いつにもまして変態っぽいことを言ってる気がします。が、これで通常です。そしてとりあえずは、このマンガはかなりおすすめですということ。シヨタ好きならなんとしても買うべし。

### その35 「女装少年アンソロジーコミック 白組、桃組」

最近マンガについてしか書いてない気がしますが、そんなこと気にしません。大学の後期授業が始まりましたが、忙しさは休み中とあんまりかわらないはずです。

で、今回の本は前回に引き続きシヨタ向けです。といっても、千尋くんとはベクトルの違うシヨタですが。女装少年をテーマにしたアンソロ本です。「女装少年アンソロジーコミック 白組 桃組」(一迅社 初版発行 白組：2010年 7月20日 桃組：2010年8月5日) 「わあい！」という、女装少年についての雑誌があり、それとのタイアップとして発行された二冊です。ちなみに、以前スクエア・エニックスからよく似たタイトルのマンガが発行されていますが、それとは別物です。

内容については説明の必要はないでしょう。「女装少年」というテーマに従って、複数の作家さんが短編を描くんです。感想についても書きにくいものです。作品によって思うものは違ってくるのですから。しかし、好きな作品は結構多かったです。ただ、本としての性質上、ひとつひとつの作品の印象が薄れてしまうのが難点ですね。これは仕方の無いことではありますが。

ちなみに僕は、スカートより半ズボンが好きです。女装してかわいい男の子より、男の子としてかわいい男の子のほうがいいってことです。だから、こういう本より少年メイドのほうが個人的には

好きです。あ、この本がダメだというわけではないですが。でも女装する素体の男の子でも、男の子の格好しているのがかわいいと思うんですよ。女装してても好きは好きなんですけどね。ちょっと違うというところで。

## その36 「キノの旅 第十四巻」

僕がラノベにはまった作品の最新刊です。「キノの旅 14」(時雨沢恵一/電撃文庫 初版発行：2010年10月10日)ここ数年は年に一卷ペースで発行されており、毎年の発売日である10月10日はキノの日ということにしています。これは僕が勝手に思っていることなんですけどね。

電撃文庫の中で古くからシリーズ(今回で10周年らしいです)で、今でも根強い人気を誇っています。僕自身、一番好きなラノベです。

内容はいたって簡単で、キノという名の少女がエルメスという喋る二輪車に乗って旅をして、行く場所でさまざまな人や出来事や国に出会うというものです。短編集で、だいたいがキノとエルメスの話ですが、ときどきシズや師匠といった別グループの話が語られます。

風刺や寓話的な話が多いです。というか、それが全てです。バツドエンドな話(幸せになるのはキノだけ、という意味)も多いですが、それが他の作品にはない魅力だと思っています。また、淡々とした文章ながら時たまに出てくる戦闘シーンがしっかり書かれているのも好きなところです。

そして、注目すべきは「あとがき」です。毎回、作者の本気のほどがつかえるあとがきが楽しめます。ここ数巻はアイデアが尽きた感が出ていましたが、今回久々にいいあとがきが見られました。

次のキノはまた一年後。この作者の次の本はメグとセロンの新刊でしょうね。楽しみに待つとします。

ところで、キノの旅のアニメのDVD boxが発売されるらしいです。アニメは見たことないので、すこし興味があります（劇場版二作目の、病気の国はDVDを持っていますが）が、買うべきかどうかがちょっと迷います。内容はいいらしいんですが、絵が微妙かな、と。

### その37 「マンガでわかる心療内科 第一巻」

小説を書いていると、さまざまな登場人物の心情を書きわけないといけないことがあります。人間の心や感情というものは不可思議でやっかいなものであり、人それぞれに違った思いを抱き、それは一様に定まらない。まことに書きにくいものであります。

とまあ、無意味な前置きはこのくらいにして本題に入りましょう。今回は、心療内科についてのマンガです。作者は本物の精神科医で、メンタルクリニックの院長だそうです。「マンガでわかる心療内科 第一巻」(原作：ゆうきゆう 作画：ソウノ少年画報社 初版発行：2010年8月1日) うつや認知症、果ては小児性愛(俗に言う、ロリコン)などの心の病気について書かれています。心療内科についてわかりやすく書かれていて、文字による解説もついているため詳しく知ることができます。

内科医と看護師の漫才で解説を行うのですが、これがものすごくおもしろい。マンガを読んで爆笑するなんて久しぶり。それほどの出来でした。その点でも、価値ある作品です。

ちなみに、ネットで掲載されている作品なので、良かったら読んでみてください。「ゆうメンタルクリニック」で検索すれば出てきます。

## その38 「レンタルきゅーと 第二巻」

今まで、何度か萌え四コマを紹介してきましたが、このジャンルを手にとるといふか知るきっかけとなった作者さんの作品です。「レンタルきゅーと 第二巻」（白雪しおん／芳文社 初版発行：2010年10月12日）最初に買った作品はこの作者の別の作品ですが、それ以来好きになった方です。

現代に良く似ているが少し違う世界。そこでは、遺伝子操作によって生まれた、人間と動物の融合体“ハーフペット”が存在する……と書くと、なんだか肩苦しい話のように思えるかもしれませんが、ここは萌え四コマ。話題だったけいおん！となんら変わりません。女の子のゆるい日常を描いているだけです。この作品ではその女の子がハーフペットなわけですね。要するにウサギ耳やネコ耳の女の子です。

この作品に限らず、白雪しおんさんのマンガは他の萌え四コマとは決定的に違う点があります。なんと、作品内に男性が登場するんです。なんか自分でもバカなこと言ってる気がしなくもないですが、他の作品の男キャラの出てこなさを考えるとこの人の話で男が自然に出てくる様はむしろ新鮮さすら感じさせてくれます。ま、女の子しか出てこない作品とこれとで、どちらがいいかという問いには答えは無いのですが、僕はしおんさんの作品が好きです。

あと、この人はシヨタを描くのが上手いです。結局はそこに落ちて着くわけですね。この人を好きになった理由も、これが主です。むしろ、これが萌え四コマの醍醐味なんでしょう。

### その39 「ストライクウィッチーズ 天空の乙女たち 全二巻」

今回はストライクウィッチーズ関連のマンガです。といっても、アニメ二期の放送に合わせて発行されたものではなく、一期のころからあった作品ですが。まだ買っていないだったので二期放送を機会にと買うことにしました。「ストライクウィッチーズ 天空の乙女たち 全二巻」(原作 島田フミカネ 漫画 たなか友基/角川書店 一巻初版:2008年7月26日) 宮藤やその他501メンバーなどアニメのキャラクターが登場しますが、アニメとは設定の異なる、パラレルワールド作品となっています。

扶桑皇国にある小さな診療所の娘、宮藤芳佳は、ある日墜落し傷ついたウィッチを助ける。怪我を治し、ウィッチを基地まで送り届けた際に出会ったウィッチ、竹井醇子は芳佳に秘められた才能を見抜き、ウィッチ養成学校への編入を勧めるが……

扶桑でのウィッチとしての生活を描いています。二巻ではアニメと同じくブリタニアへ行ってますが、扶桑のキャラが引き続き登場しているために他の501メンバーは(坂本少佐も含めて)あまり活躍していません。そもそもアニメとは話が繋がっていないため、アニメしか観ていない人にとっては期待したものとは離れているものを読むことになるかもしれません。

しかし逆に、ストライクウィッチーズの世界観をよく知っている方にとっては、ちょっと内容が薄いと思われる気もします。

僕自身の感想としては、二巻のブリタニア編が余計だったんじゃないかな、と思いました。扶桑勢が引き続き出てくるのであれば、二巻全部扶桑編でも良かったのではないかと。まあ、そこら辺は

アニメとの関係とか大人の事情があつたのかもしれませんが。あと、終盤の展開が内容が薄くて、なんとなく打ち切りエンドを思わせるのも気になりました。

とまあ、こんなことを言ってますが、ひとつの作品としてはなかなかの良作だったと思います。絵が好みでしたし、一巻の話は好きな部類でした。アニメしか観ていないぜという方も、これを読んで第501統合戦闘航空団以外のウィッチについても知るきっかけとすればいいでしょう。二巻で完結しているので、お手頃ですしね。

## その40 「ストライクウィッチーズ 公式コミックアラカルト」

再びストライクウィッチーズ関連本です。「ストライクウィッチーズ 公式コミックアラカルト」（原作 島田フミカネ／角川書店 初版発行：2010年9月25日） いわゆるアンソロジーコミックであり、ストライクウィッチーズについていろんなイラストレーターさんや漫画家さんが短編を書いています。大半が501メンバーに関する話ですが、マルセイユの所属する「ストームウィッチーズ」の活躍やエイラのかつての戦友である二パの話もありましたね。そういうのも含めて、非常にバラエティに富んだ作品群でした。

読んで思ったのが、各作家さんが本当に好きなものを描いているということでした。時にそれが自己満足となっているようなものも見受けられましたが、それぞれが得意な事、描きたいものを描くことで結果的に良いものが生まれています。

もちろん、数が多いので好きな作品嫌いな作品あるとは思いますが、ファンなら買って損はない一冊でした。

## その41 「ストライクウィッチーズ キミとつながる空」

三回連続でストライクウィッチーズのマンガですがご容赦を。「  
ストライクウィッチーズ キミとつながる空」(原作：島田フミカ  
ネ 漫画：京極しん/角川書店 初版発行：2010年9月25日)

時系列的にはアニメ一期と二期の間の期間を描いています。ガリア解放により任務を終えた第501連合戦闘航空団は解散し、メンバーは新たな生活を送っていた。ある者は故郷に帰り、ある者は荒廃した戦地の復興作業にあたり、またある者は新たな戦場で武器をとっていた……。

小説版の書評で紹介した、京極しんというイラストレーターさんがマンガを書いてます。今作が初めてのコミック作品らしいのですが、そんなことは全く気になりませんでした。描く量が多くなっても、絵の質に変化は見られませんでした。うれしいことです。

ストーリーも京極しんさんのオリジナルかどうかは不明ですが、普通以上に楽しめました。501以外のウィッチが多く出ていたのも高評価です。

もともとは雑誌に掲載されていた作品です。雑誌を読んでないのでわからないことですが、加筆されたシーンもあるらしいので買ってみたら良いと思われます。

## その42 「ロウきゅーぶ! 第6巻」

好きなシリーズの最新刊が出るというのは無条件に喜べるものです。ですが、このシリーズは他の好きな作者さんの新刊と発売が重なってしまうのでどうしても読むのが後回しになってしまいます。そうです。キノの旅の作者さんと重なってしまうわけです。両方とも一定の執筆速度を保っているということなので、いいことといえばそうなんですけどね。

では本題。ロリがテーマのスポーツコメディの最新刊です。「ロウきゅーぶ! 第六巻」(蒼山サグ/電撃文庫 初版発行:2010年10月10日)今回は短編集です。表紙は五人が一周したので再び智花です。浴衣姿が美しい。

分量の半分は、電撃文庫MAGAZINEという雑誌にすでに掲載されていたものを再会改稿したもので短編がふたつです。もう半分が書き下ろしで、掌編ふたつと中編がひとつです。雑誌掲載分はすでに読んでいたのですが、これを機会にともう一度読むことにしました。

短編なので主人公昴とバスケット部五人の日常を描くことに重点を置いていて、バスケットのシーンはありませんでした。その意味での作品の魅力は落ちているかもしれませんが。しかしそれ以外はいい感じに力が入っていました。つまりラブコメ的な意味で、です。

個人的に評価したいのが、短編集でありながら一冊の中でちゃんとした話として完結しており、シリーズの中でもちゃんと繋がりをもったひとつの巻として成立させられてることです。もちろんそれは、本のほぼ半分を占める中編書き下ろしによるものが多いのでしょうが、雑誌掲載分を少し改稿し、伏線を入れておいたりしてい

るのが評価できました。

あとあいかわらずですが、昴が男らしいです。恋愛に関してはまったく鈍感ですが、小さい女の子をうまく教え導き、バスケ部が悪い男に絡まれていれば見事に助ける。なかなかのいい男ぶりです。

またこの巻にはバスケ部メンバーの両親が何組か登場します。昴は両親たちにも立派なコーチとして認識されていき、それが自信へとつながっていく。主人公の成長も楽しみになっていく巻でした。

### その43 「星を継ぐもの」

たまには一般書の紹介を。これを読んだのは数カ月前なのですが、忘れたのと落ち着いた時に感想を書きたかったのとで今から書評します。

実はこの本、中学生の時一度読んでます。読んでいるのですが、当時の僕の理解力ではさっぱりな内容でした。なのでリベンジの意味で読んだわけです。「星を継ぐもの」(ジェイムズ・P・ホーガン/創元SF文庫 初版発行：1980年5月23日)作者のホーガン氏は、この作品で無名作家から一躍一流の座へと上りつめた人です。それほどまでに名作であるというこの作品ですが、僕自身この評価は正当だと思っています。

月面で真紅の宇宙服をまとった死体が発見された。調査の結果、これは人類の把握するどの人間でもなく、それどころか約五万年前にはすでに死んでいたことが判明した。世界中から各分野の科学者が集められこの死体の正体を解明しようとするが、謎はあまりにも多かった。

派手な戦闘なんかはありません。SFですが、これはどちらかというと本格的なミステリーです。明らかに人間とは異質のこの物体はなにか？それを解き明かすために科学者が地球や月で調査し、終わらない議論をする。ひとつの謎が解決すれば、また多くの謎が現れる。しかしそれが、最後にはきれいに解決されるのが鮮やかに思いました。月の起源や人類の進化の過程など、科学上解決されていない問題に対しても、フィクションとしてですが答えを当てはめ

ているのも好みでした。もちろん現実ではないことですが、妙に腑に落ちるところがあるのも、この作品の魅力でしょうか。

中学生の時は理解できなかったこの作品。それはおそらく、最初の方にSFな専門用語がどんどん出てきたからだと思っています。今読めば、本当におもしろいと思える作品でした。

#### その44 「プラナス・ガール 第三巻」

女装少年マンガの新刊です。「プラナス・ガール 第三巻」(松本トモキノスクエア・エニックス 初版発行2010年11月22日)

あらすじは以前紹介したのでいいでしょう。前二巻と同じく、女装っ子のヒロイン絆と、彼に気に入られてしまった主人公槇とのラブコメです。基本的に一話完結ですが、この巻は前後篇が多かったです。あと小ネタ集もありました。

物語の展開としてなにか進展があつたとかはありませんでした。特筆すべき新キャラもいなかったです。まあ、絆のことを好きになった男の子つてのが出てきましたが……再登場は微妙かな…

それにしても、女装少年ということを除いてもこのマンガはおもしろいです。普通のラブコメとして評価できるので、一般の読者にもお勧めできます。というか、絆がかわいいです。ときどき男だということを忘れてしまいます。こういうのは女装少年では割と珍しいケースですが、そういうのもありかな、と。

## その45 「よめせんっ！ 第三巻」

よめせんしりーずの最新刊です。まあ、読むのがずいぶん遅れてしまいました。

鯉屋家繁栄のため千人の嫁を探すねこがみさまと、それに振り回される鯉屋家。

ある日、広人の前にあやの名乗る狐の少女が現れる。広人を婿にするという彼女に、ねこがみさまは嫁候補ができたとはしゃぎ。しかしあやのと狐の一族には隠された計画があるようで、そして広人を狐の一族に入れるということは鯉屋家から離れるということ、当然そんなこと受け入れられるはずもない。双方の主張が食い違い、個人の思惑も入り乱れながらふたつの家は真っ向から対立することになる。

今まで通りラブコメ要素もありましたが、基本的に普通のコメディとして楽しめます。それでいて深いテーマも備えている、いいストーリーでした。

そしてあいかわらず広人がいい男です。ねこがみさまの嫁集めには何も言えない弱気な少年でありながら、いざ誰かに危機が迫ると強い意志で戦える。優しさと強さを兼ね備えた主人公。しかもかわいいです。

エピソードで、あやのや前巻で出てきたひかるが学校に通うこと

に触れられていました。次巻は学校がメインの話になるような気がします。あとがきを見る限り鯉屋家のメンバーに焦点を当てた話になると読めます。いずれにせよ続きが楽しみな作品です。

## その46 「私のおウチはHON屋さん 第一巻」

突然ですが、みなさんは「エロ本」を買ったことがあるでしょうか？ そうです。18歳未満は買ってはいけない、エロい本のことです。買ったことがありますか？

書店によく行く僕ですが、エロい本が売ってる場面ってあんまり見かけません。18禁のマンガコーナーはたまにありますけど、エロ雑誌となると皆無ですね。実際その手の本は消費者への配慮として、18禁コーナーなどといって一般書とは別のスペースに置く必要があったりして、管理が面倒らしいです。そのためにそもそも販売しないというケースが多いそうです。

コンビニでは必ずといっていいほど見かけます。それも雑誌コーナーの端っこで、成人向けという表示にはさまれて、です。

そういうのとは別に、その手の本を専門に扱う店というものがあるらしいです。本屋さんで、置いてあるのはみんな18禁。今回紹介するマンガは、そういう店が舞台です。「私のおウチはHON屋さん」(横山知生/スクエア・エニックス 初版発行：2010年9月22日)なんか前置きにいろいろ書いてますが、本作は明るいコメディです。

小学五年生の女の子、中沢みゆには悩みがあった。彼女の家は書店、それもエロい本ばかり売る書店なのだ。そんな恥ずかしいもの売るのは抵抗があるし、友達を家に呼ぶこともできない。とはいえ、たった一人の家族である父を放っておくわけにもいかず、みゆは店の看板娘となり在庫からお客様の要望にぴったりの本を選ぶことに長けたスーパー店員ぶりを発揮することになるのだった。

みゆと、店に訪れる様々な客との交流がメインですが、なんといってもみゆちゃんがかわいいです。ちょっと個性的な父やエロマンガ家さんにふりまわされつつがんばる姿が、本当にかわいいんです。話の内容もなかなかのもので、一話一話がしっかりしていておもしろいです。

ちなみに、エロ本屋ですが、来る客は別にキモオタとかじゃないです。なんというか、普通の男で紳士（変態という意味ではない）で好感のもてるお客様です。そこら辺は安心してください。というか、ちよつとかっこいいです。

まあそんなところも褒めつつ、お勧めの作品だということを強調しておきます。

## その47 「スーパー男の娘タイム、はじまるよっ」

一定期間をおいてこの書評に現れる、女装少年もののマンガで、アンソロジーです。「スーパー男の娘タイム、はじまるよっ」(エンターブレイン 初版発行：2010年9月6日) 最後の「」までがタイトルみたいです。あと、この呼びかけに対してどう応えるべきかというと、やはり「わあい！」なんでしょうかとか、そういうことを考えさせられるタイトルです。

内容は……アンソロジーものなので説明しづらいですね。いろんな人がひとつのテーマに沿って短編を描いてるわけです。

全体としての評価ですが、いいと思いました。作品に好き嫌いはありましたが、おおむね良作揃いで、以前紹介した「女装少年アンソロジーコミック」よりも好きでした。

この本について言及することもこれ以上ないので、女装少年についてちょっと語りましょうか。

今年の春に、女装少年の専門誌「わあい！」が創刊されました。この「わあい」という言葉は、ショタ全般に使われる言葉であり女装少年に限ったものではないので、そこはなんか気になりますがそれはそれ。ショタ好きとしてはうれしいことでした。そして秋には同じ趣旨の別の雑誌「おと娘」が創刊。これをもって、女装少年というジャンルはそれなりにメジャーなジャンルとして確立したと

言えるのではないでしょうか。

これは実に結構なことです。女装少年は大好きです。しかし同時に、ある種の物足りなさも感じています。僕は女装少年好き以前に「シヨタ」が好きなんです。日ごろから思っていることですが、女装した男の子はかわいいですが、女装しなくてもかわいい男の子なら、そっちの方が萌えるんです。例えば、少年メイドの千尋くんとか。しかし、そういうキャラはまだメジャーじゃない気がします。

そういうわけで、僕は「非女装少年」「非男の娘」のシヨタ雑誌が創刊されるのを心待ちにしているのですが……まだまだ先は長いかなと、そう思う今日この頃なわけです。

## その48 「KAGEROU」

たぶんこの冬一番の話題作です。「KAGEROU」（齋藤智裕／ポプラ社 初版発行：2010年12月15日）この本の出版が決まってからというもの、いろんな意味で注目を集めました。

なぜ注目なのか、知ってる人も多いとは思いますが、簡単に説明しましょう。作者の「齋藤智裕」さんですが、一般にもっと知られている名前を「水嶋ヒロ」といいます。そうです。あの俳優の水嶋ヒロです。

彼が所属する芸能事務所をやめたのが今年の九月のことだったでしょう。それからしばらくして、彼が「第五回ポプラ社小説大賞」なるものを受賞したというニュースがきました。

このニュースは多くの人間に期待と憶測とをさせることになりました。人気俳優の処女作の内容はどんなのか、と。そして、これは本当に大賞に値するものなのか、と。要するに、出来レースではないかという疑惑があったわけです。

ポプラ社というと、名前自体は結構有名な会社です。なぜかというところ「かいけつゾロリ」や「ズッコケ三人組」のシリーズを出版している会社だからです。個人的には江戸川乱歩の怪人二十面相シリーズをよく読んでました。言うまでもないですが、いずれもいずれ児童書です。一般書も出してはるはずですが、そちのことはよく知りません。児童書も、さすがにあんまり読まなくなったので、この会社の現状もいまいちゃわかっていないです。もしかしたらお金に困ってるのかもしれませんが、そういうことを調べる方法も知りません。

いずれにせよ、多くの人にとって発売が待ち遠しい本でした。僕個人としては、水嶋ヒロは仮面ライダーカブトの主演だったということ以上の思い入れはありませんが、本の内容は気になってました。最初は立ち読みで済まそうかとも思いましたが、それができなかったので結局買いました。立ち読み防止ビニールで包まれてたんです。マンガじゃあるまいし……

あらすじですが、アマゾンなどで紹介されたものが多くとりあげられていたので、それを紹介しようと思います。  
以下引用

『KAGEROU』—— 儚く不確かなもの。

廃墟と化したデパートの屋上遊園地のフェンス。

「かげろう」のような己の人生を閉じようとする、絶望を抱えた男。

そこに突如現れた不気味に冷笑する黒服の男。

命の十字路で二人は、ある契約を交わす。

肉体と魂を分かつものとは何か？ 人を人たらしめているものは何か？

深い苦悩を抱え、主人公は終末の場所へと向かう。

そこで、彼は一つの儚き「命」と出逢い、

かつて抱いたことのない愛することの切なさを知る。

引用終わり

ネット上では中二的と言われてました。僕としては一読して、なんとなく現実離れしているというか、抽象的だという印象を受けました。ファンタジーな作品だと、事前にどっかで読んだからかもしれませんが、実際に作品を読んでみてもう一度このあらすじを読ん

だら、まあ、その通りのお話でした。

アマゾンのレビューでは、この作品はすいぶん批判されています。反面、楽天のレビューは高評価が多いです（まだ読んでないけど期待をこめて 5 つですっ、みたいなもあります）。両者の利用者が違うというのが原因でしょうか。発売前にハードルが上がりすぎたために、評価が厳しめになるのは当然といえば当然ですが。

個人的な感想を書きましょう。なんというか、定価で買う本ではないと思いました。内容にあまり期待はしてませんでしたし、買うにしても後悔するのははじめからわかっているというスタンスで買ったわけですから、そこまでダメージはありませんでした。しかし不満はいくらでもあります。

まず、ページあたりの活字の数が少なくスラスカで、ページ数も少ないため読むのがものすごく簡単だということ。簡単なのはいいことだと思う人もいるでしょうが、文字の分量が少ないということとはそれだけ内容が薄くなるということになります。少ない文字数で読み応えのある作品を書くというのはいいことですが、それをするのには相応の技術が必要になります。

その内容ですが、やはりいまいちでした。物語としての起伏に欠け、続きをよみたくなるという気がまったく起きないものでした。なるほど、ページのスラスカさで一気読みするのが最良の読み方だとも思いました。先ほどあらずじが中二的だという話を書きましたが、内容はまさしくその通り、中二病みたいでした。ファンタジーではありませんでしたが、ぶつとんだ設定（子どもが考えそうな、という意味。同じようなものは多くある）で、技術的な考証とかはあまりさせていない印象を受けました。

文章自体は問題なく読めました。並みの文章力、という意味ですが、そこはよしとしましょう。ギャグが寒いという意見もあります。が、それはわざとなはずです。作中でもおもしろくないものと受け止められていましたし、それが登場人物の性質を表してもいました。しかし総合的に見て、あんまり上出来な作品ではありません。この本に1400円出すぐらいなら、そのお金で文庫本二冊買って釣りをもったほうがいいでしょう。文庫本がどういうものであれ、そっちの方が分量がありますし、多くの場合おもしろいです。

その49 「落花流水ノベル 落下知多少 〽花 落つること知る 多少」

以前に紹介した萌え四コママンガのノベライズです。「落花流水ノベル 落下知多少 〽花 落つること知る 多少」(秋月ひろ 原作：真田一輝 芳文社KR文庫 初版発行：2007年7月31日)

キャラクター萌え第一のジャンルが原作ですが、小説なのでもちろん絵が多くないわけです。一冊の本としておもしろいかどうかは文章そしてストーリーにかかっているわけです。まあ、それでもラノベではあるので絵も重要な要素なわけですが。時系列的には、秋穂が入学した年のことを書いているので夕と暁のふたりは出てきません。

話は、マンガの文章化+それを発展させてのオリジナルといった趣でした。読んでいるとどこかで見た場面だなと思うことが多いですが、そこからオリジナルな方向(原作の話を変えるのではなく、発展させたり詳細を書いたり)に持っていくのがうまく、おもしろかったです。

原作も好きなんです、その良さを十分に出せていました。あと、小説版オリジナルキャラも好きになれます。

原作を知らなくても読めるようにはなっていますが、できれば読んでおいたほうが楽しめるでしょう。

## その50 「涼宮ハルヒちゃんの憂鬱 第五巻」

涼宮ハルヒの公式同人本的な位置づけで世に出て、いつのまにかこつちがスタンダードになつてゐる気もしなくはないマンガの最新刊です。「涼宮ハルヒちゃんの憂鬱 第五巻」（ぷよ／角川書店 初版発行：2010年11月26日）前巻の発売日からずいぶん時間が経つたなと思いましたが、同じ作者の「長門有希ちゃんの消失 第二巻」の発売日と合わせたようです。ちなみにそちの方はまだ買ってません。本屋に置いてなかったからです。またどこかを探します。

「涼宮ハルヒの憂鬱」シリーズの登場人物がコメディー的にデフォルメされて、ドタバタ劇を繰り広げるといふ内容です。連載初期は原作のストーリーのパロディが多かったですが、今では完全オリジナルな話が多いです（とはいえ、この巻にも朝比奈さん（大）が原作に合わせた行動をしようとする……という話があるにはあります）。

作者は森さんが好きなのか、彼女のいつも出番が多いです。しかしこの巻では出番は少なめ。かわりに、なぜか新川さんが活躍します。しかもカッコいいです。まさにダンディズムです。あと国木田が女装してました。

作者の絵が好きな時点で、おもしろくないという判定は下せません。それに加えて、ギャグのセンスもいいです。まあ、何もしなくても有名な作品なので、わざわざお勧めとか言う必要もないかも

れませんが。

ところで、原作の新刊が長らく出版されてませんでしたね。しかしうれしいニュースが。来年5月25日に待望の新刊「涼宮ハルヒの驚愕」が発売されることが決定したそうです。上下巻同時発売で600ページにもわたる大作だとのこと。長らく待っていた分、期待も大きいですね。

## その51 「R18! 第三巻」

エロゲ製作会社を舞台にした萌え四コママンガの最新刊です。「R18! 第三巻」(ぷらぱ/芳文社 初版発行:2010年12月12日)

日常系なので、大きなストーリーの進行とかはありません主人公が入社して一年経ったとか、そういうのはありましたが話に大した影響をもたらしません。

主人公里佳子が、いろいろ暴れてます。入社から一年、グラフィッカーとしての腕はまだまだでエロいことへの耐性もあんまり上がっていませんが、おっぱいに対する情熱は日に日に増しているようです。メイド喫茶でも帰りの電車であつてもおかまいなしに、なんか炸裂しています。そういう意味では一巻から成長しているのかも。

題名はR18ですが、内容は全年齢対象です。危ない単語は伏せ字になってますし、適切なところでモザイクがかかってますから。ただし、伏せ字がなにを表してるかがたまにわからなくなります。わからない方がいいこともあるかもしれませんけどね。

ところで、最近(と言っても去年の十月ですが)に初めてエロゲというものを買いました。こういうものに全く興味がないわけではなかったのですが、なんとなく手を出せないでいました。けっこう高いものですね。

それがなぜ買う流れになったのかと言いますと、そうです。シヨタです。主人公の弟がかわいくて、一目ぼれしてしまったんです。ちなみに攻略対象じゃなかったですが、満足なので良しとします。シヨタでもエロゲでも、好きな事をするというのは幸せだってこ

とです。

## その52 「メイのないしょ 第三巻」

女装少年マンガの最新刊です。「メイのないしょ 第三巻」(日下皓/富士見書房 初版発行:2010年9月9日) 実はこれ、発売されているのをしばらく知らずに過ごしてました。書籍の発売日を忘れるって、よくあることです。僕の場合、ラノベ以外は基本把握してません。とはいえ、定期的に書店に行って、新刊はチェックしているのですが、ま、店頭に置いてなかったとしたら仕方ないですね。

メイの通う女子高に交換学生としてやってきた秦野レオという少年は、なんとメイの幼馴染だった。もちろんメイが女装少年であることは知らないはずだが、ふとした拍子にそれが発覚してしまい……

新キャラのレオンは、メイと同じく男の娘です。女装してるのが普通であるメイとは違って普段は男であるわけですから、女装に対する姿勢が微妙に違います。僕としては、知り合いには女装を隠そうとしたりするレオンの方が好きです。ただ女装してるだけでは女の子と変わりませんからね。中身はちゃんと男の子なのがいいです。

レオン以外での話をする、この巻の話は、海に行ったり同人誌即売会があったり精神入れ替わりイベントがあったりと、割とお約束な展開が多かった気がします。そういうのをしっかり描けていたので、読んでおもしろかったです。

新キャラの加入で、なんとなく新しい方向性が出てきた気がします。メイのキャラについては物足りないところもありましたが、続

きが気になってきました。

### その53 「独白するユニバーサル横メルカトル」

以前「メルキオール」の惨劇」という小説を紹介しました。今回の本は、同じ作者の短編集です「独白するユニバーサル横メルカトル」(平山夢明/光文社文庫 初版発行：2009年1月20日)

表題作である「独白するユニバーサル横メルカトル」は第59回日本推理作家協会賞をとった作品であり、同作を含んだ短編集が「このミステリーがすごい！」の2007年版で第一位となったというのですから、評判を見る限り名作であることはわかります。またネットでの評判を見る限り、みなさん一様にグロいとか残酷だとか書かれていて、これは「異常快樂殺人」で読んだような、平山さんの魅力的な残酷表現が思う存分読めるものだ」と期待して買いました。

ま、そんなわけで読んだのですが、楽しめはしました。しかし残酷描写は期待していたほどではない、というのが正直な感想です。それは本に問題があるのか、それとも問題があるのは僕のほうか。なんとなく後者が原因な気がします、そうだとしたら残酷なものが平気になつてる自分に不安を覚えなくてもいいです。

いえ、十分おもしろかったです。ただ、「異常快樂殺人」で感じた、思わず顔をしかめる、目を逸らしたくなるという感覚を覚えなかったわけです。慣れたんでしょうね。

それにしても、本当に魅力的な作家さんだと思います。残酷さひとつとっても、肉体的はもちろん、精神的あるいは倫理的にも恐ろしいものを書いてくれます。文章力も高く、しかも多様な種の文体をやつります。個人的には童話的な話し言葉でホラーを読まされるのが、なかなか怖いとおもっています。そして不快なものを書くのがものすごくうまい。これは前回は言いましたっけ。

ストーリーについても、同じです。読み終わって嫌な気分しか残らない。救いのまったくない結末。癖になります。

なんかこういうことを書くと、けなしてるようにしか見えませんね。しかし、もちろん違います。この人の作品は好きです。心地よい不快感なんて、意味不明な感覚を感じさせるなんて、普通じゃできないことです。好きだけど他人に薦めるのをためらう、奇妙な作家ですが、好きです。

## その54 「長門有希ちゃんの消失 第二巻」

涼宮ハルヒの憂鬱、その世界観をリビルドしたマンガ作品の第二巻です。「長門有希ちゃんの消失 第二巻」(ぷよ/角川書店 初版発行：2010年11月26日)

前巻ではクリスマスというイベントがありました。今回はそれがバレンタインデーです。長門有希ちゃんが大好きなキョンにチョコを渡すためにがんばる話です。あと、ハルヒと古泉が本格的に話に関わってきます。そんな巻です。

長門とキョンの関係が進展しているかは微妙ですが、日常系ではないのでちゃんと話が進んでるのがいいです。あと、相変わらず長門がかわいいです。そして朝倉が母さんです。ハルヒは、そうですね……原作(あるいはハルヒちゃん準拠かもしれない)通りの性格です。ただし消失の世界観なので髪が長いです。そしてそれに違和感を持たなかったことに驚き。原作はショートだったのをすっかり忘れてました。原作を長らく読んでなかったのです。

巻の最後に、キャラが進級していました。原作では今のところ、進級したばかりの時点で話が止まっているので、マンガの方はどうするのか気になるところです。新刊に合わせるのかな？

読んで強く思ったことが、「原作を読みなおしたい」もちろん来べき新刊に向けてです。現在下宿の身で、本は実家にあるので、読むとしたら春に帰省するときですね。そして新刊の発売を心待ちにしましょう。

## その55 「夜が運ばれてくるまでに」

「キノの旅」などで有名なライトノベル作家の書いた、「絵本」です。「夜が運ばれてくるまでに」（時雨沢恵一／アスキー・メディアワークス 初版発行：2010年12月25日）

レーベルは「メディアワークス文庫」というもので、これは電撃文庫の作家さん達がライトノベルよりは少しレベルの上だった一般書っぽい作品を書くもの、らしいです。僕もよくわかってませんが、こういう認識でいいでしょう。

そういうわけで、普通の文庫みたいな本が展開されているレーベルですが、この本は少し毛色が違います。さっき言ったように小説ではなく、絵本です。

正確には掌編集とも言いますか。一話一話がとんでもなく短いお話に、黒星紅白さんというやはりキノの旅のイラストレーターさんの絵が多数挿入されている、という趣向です。実はこれの一年前に同じような本が出版されてまして、その続編と言えるかもしれません。その本のタイトルは「お茶が運ばれてくるまでに」喫茶店でお茶を注文する。そのお茶が運ばれるまでの少しの時間に読み切れる話という意味です。本作は、寝る前にちよつと読むというコンセプトでしょうか。

ひとつの話が本当に短いです。読むだけだったら、だいたい三十秒ぐらいで終わります。つまり、文章を追うだけだったらあまり楽しめないということ。ではどう楽しむかというと、「味わう」ことだ

と僕は思います。話のそれぞれが、なにか心に響くものを持っている。それは気付きにくい真理だったり、我々や社会に対する強烈な皮肉だったり。それを読んで驚いたり心を痛めたり。はっとしたり忘れてたものを思い出すなり。そういう感情をかみしめることがこの本の読み方ではないかと。そういう意味で、内容は濃いです。

黒星さんの絵ですが、「お茶が運ばれてくるまでに」とは画風が変わっていました。「お茶」では人物や物が白いシルエットで描かれていて、人物はなぜかネコミミっぽいものがついていましたが、今作ではシルエットではなく普通の描写になっています。どっちがいいか、文に合っているかの判断は難しいですが、いつもの黒星さんの絵に近いのは今作の方でしょうか。

キノの旅みたいな短編集とかを期待している人には少し期待に沿える本じゃないかもしれませんが、文の内容はキノに通じる所があります。キノの旅が寓話的に世界を風刺していることを、ここでは直接文章で書いているイメージでしょうか。キノファンにも楽しめる一冊です。

## その56 「テルマエ・ロマエ 第二巻」

風呂がテーマのローマ人のマンガ、買ったのに読むのをすっかり忘れていていまさら更新です。第三巻の発売には間に合わせたぜ。

「テルマエ・ロマエ 第二巻」(エンターブレイン/ヤマザキマリ  
初版発行：2010年10月5日)

風呂を通じてローマと現代の日本を行き来するという能力を持ったローマ人、ルシウスがさまざまな問題を風呂で解決するというお話。風呂場で暴れる異民族も皇帝の病も、評判のよくない為政者のイメーリアップの任すらも、日本の風呂からヒントを得て解決するルシウスはまさにローマ人の鑑！

ルシウスに降りかかる問題は多様で、時には政治的にローマの存続をも左右するもの。しかし、ルシウスはそれらを風呂で解決していく。その過程で日本の風呂のあり方、気付かなかった風呂の性質あるいは知らない風習などをローマ人の視点から見るのはなかなかおもしろいものです。

基本的に一話完結のお話ですが、大きなストーリーは存在します。そして第二巻のラストでなにやら物騒なセリフが。続きが気になる第三巻は、この春に発売らしいです。買ったらできるだけ早くここに書きます。でないとまた、ずるずると読むのが先延ばしになるぞ

……

## その57 「マンガで分かる心療内科 第二巻」

心の病気をマンガで解説する本の第二巻です。ネットで読めるものをわざわざ買うのは、別に世の中の電子書籍化の流れに反抗するためじゃありません。買わないと読まないからです。「マンガで分かる心療内科 第二巻」(作画：ソウ 原作：ゆうきゆう/少年画報社 初版発行：2010年12月6日)

前巻に引き続き、さまざまな心の病気について解説しています。適応障害や窃視症(「のぞき」を正式に言うところなるらしいです)あるいは「人はなぜ後悔するのか」なんて身近な問題も扱っています。

個人的には「バウムテスト」の話が好きでした。白紙を渡され、「ここに木を描いてください」と言われ、描かれた木でその人の性格や精神状態を調べるというテストです。是非一度やってみてください。

ギャグのレベルと多さもあいかわらずでした。下手するとギャグ主体で売っているマンガよりもおもしろいかもしれません。新キャラが出ていますが、なかなかの破壊力です。

それでいて、心療内科の知識がえられるのですから、なかなかの良書だとおもいます

## その58 「HEROMAN 第三巻」

アニメの放送終了から日が経ちますが、コミックはまだ連載中のようです。「HEROMAN 第三巻」(原作：スタンリー／漫画：太田多門 スクエア・エニックス 初版発行：2010年12月22日) 漫画版でもジョーイくんはかわいいです。

ストーリーはアニメとほぼ同じで、省略箇所がいくつかあって感じでした。「タマ」はなくなっていましたね。ドクターミナミはちゃんと出てきましたが、あととウィルとニツクの描かれ方も変えてましたね。アニメでは身勝手な行動をしていたように描かれていたウィルですが、こちらではリナを守るヒーローになりたいという思いがあって、よかったです。やっぱり兄貴はカッコいいものですね。

とはいえ、その分サイとデントン先生の活躍が省かれていた気がします。sちよつと書け足すぎたかな、と。もう一卷分ぐらい延ばしてもよかったと思います。

次回からはドクター・ミナミ編です。あ、そのまえに日常編かな？ ヒューズさんやホリーもちゃんと出てくるようなので、期待が持てます。

## その59 「閉鎖病棟 Closed Ward」

例えば書店に、別に欲しい本があるわけでもなく行くと思います。

そして、なんかおもしろそうな本を読みたくなくなった。これはよくあることですが、こんな時どんな本を買うべきでしょうか？ いえ、本の好みが人それぞれなのであれば、「どんな本」を買うべきかは問題ではありません。問題とすべきは「どんな本がおもしろそうかの判断をするか」です。

目の前にずらりと本が並んでいるとします。平積みになっているとしても、こちらに向けているのは背表紙だけだとしても、まず目に入るのはタイトルでしょうか。ラノベだったら、表紙の女の子の方が目を引くこともありますね。とにかく、タイトルと表紙で、ある本に興味が湧いたとします。次に手をとるべき行動は？ そう、その本を手にとる。気になるのは表紙ではなく裏表紙、本をひっくり返します。そこに書いてあるあらすじを読む。なるほどこれはおもしろそうだと思ってはじめて、買うという流れになるわけです。

ちなみに電撃文庫など、後ろにあらすじが書いてないレーベルもあります。電撃文庫はカバーの折り返しにあらすじがあるのですが、こういうラノベは立ち読み防止のためのビニールがかけられていることもあるので、残念ながら見れないこともあります。そういうときは、書名を覚えて家に帰ってからネットで内容と評判を調べることになります。一般書でも時々こういうことをしたりもしますが、この場合次に書店を訪れる時にはそのことをすっかり忘れてしまつてたりするために、買う確率は少し落ちます。

まあ、ラノベだったら表紙の女の子が可愛かったらなにも考えずに買ったり、一般書でも話題作なら衝動買いに近いことをすることもままあるため、常にそんな面倒な事をしてるわけでもないのです

が。というか、こんなことをしてるから「積ん読」が増える一方なのか。

話が逸れましたが、僕が言いたかったのは、本の後ろに書いてあるあらすじはものすごく大事である、ということですよ。開いてない本についての情報をその場で得るには、このあらすじを読むしかないわけなので。

あ、ちなみにハードカバーの本とかだったら後ろにあらすじなんかかいてませんね。帯がついてくるぐらいです。だからこれは文庫本限定のお話ですが……まあ、学生って基本お金がないもんなんです。僕は基本、比較的安い文庫本しか買いません。

そんな大事なあらすじですが、時たまに実際の内容と違うことが書いてあることがあります。たとえばその本が、あらすじ以上に面白い内容だったとしても、読者からすると期待とは違う本を読むことになるわけですからあんまりいいこととは思えませんが、そういう本がたまにあります。正確にはあらすじと違うというよりは、ちょっとずらして書いてあるといいますか。その程度のことなんですけどね。

「閉鎖病棟 Closed Ward」（帚木蓬生／新潮文庫  
初版発行：1997年5月1日）この作品も、あらすじと内容がちょっとずれていたというか受けた印象とちがうというか、そう感じた作品でした。いえ、いい話だったんですけどね。ちなみに著者の名前は「ははきぎ ほうせい」って読むらしいです。

まず、本の後ろに載っていたあらすじを紹介しましょうか。

## 以下引用文

とある精神科病棟。重い過去を引きずり、家族や世間から疎まれ遠ざけられながらも、明るく生きようとする患者たち。その日常を破ったのは、ある殺人事件だった…。彼を犯行へと駆り立てたものは何か？その理由を知る者たちは―。現役精神科医の作者が、病院の内部を患者の視点から描く。淡々としつつ優しさに溢れる語り口、感涙を誘う結末が絶賛を浴びた。山本周五郎賞受賞作。

## 引用終わり

なんとなく、話の冒頭に殺人事件が起こって、それにまつわる様々な人間の群像劇が展開される。そんな話を予想していました。お前の勝手な思い込みだと言われればそれまでですが、実際の話は想像と違ってました。

冒頭、三人の人物の過去が語られる。望まぬ妊娠をした少女、父親が狂ったその息子、家族からのけ者にされる知恵遅れの男。その後、場面は主な舞台となる精神病院へ。世間から隔離されたこの場所でも、患者達は互いに支え合い、平和に暮らしていた。しかしひとりの問題ある患者が原因で、そんな平和に少しの乱れが生じる…。

精神病院の風景を、患者である「昭八ちゃん」の目から描いています。精神病患者と言っても、我々健常者となんら変わることはなく、「狂人」のようなイメージは一切受けませんでした。にもかかわらず、病院の外部と患者の間にある溝と偏見。そして患者仲間の交流。それらのエピソードひとつひとつが丁寧で、かつ考えさせられます。

あらすじにあつた殺人事件がいつくるかとわくわくしながら読んでたんですか、それが起こるのは話の後半です。この本は、どちらかというとその殺人が起こるまでの登場人物の心情、そして起こったから変化する心情と変化しない心情を味わうものだと思います。あらすじとは違ふおと思った話ですが、この内容の方が秀逸だと思いました。

## その60 「ロウきゅーぶ! 第七巻」

アニメ化も決定したライトノベルの最新刊ですよ。「ロウきゅーぶ! 第七巻」(蒼山サグ/アスキー・メディアワークス 初版発行:2011年2月10日)

この前にこのシリーズについて、日常のシーンとバスケのシーンの描き分けができるかどうか心配だからアニメ化には反対だとか書いていたと思います。ですがアニメ化が決定してしまったので、この際でのひら返しましょう。アニメ楽しみです。動く智花がはやく観たいです。夏陽くんが動くのも楽しみです。やっぱアニメになるのはうれしいものです。出来がいまいちだと、途端に嫌になりますが、とりあえずは放送を待ちましょう。

そんなことより最新刊です。今回は久々に「バスケ!」って感じのストーリーで、よかったです。愛莉の兄や昴の中学生時代の因縁の相手が登場して、ヒロイン達より昴の成長がメインな話でした。さすが主人公。挫折と成長という、なかなか燃える展開を見せてくれました。そうですね、コーチである以前に一介のプレイヤーなわけですから。挫折して、なんとか起き上がって相手を打ち倒そうという気概。かっこよかったです。

試合も、なかなかよかったです。小学生と高校生がチームを組むという状況が出てきますが、よく考えればこの作品でしか実現できないことでしょう。小学生が高校生に勝っている点とはなにか。それを生かすにはどうすればいいか。そういうことをよく考えられて

いました。

この作品、バスケのシーンがおもしろいんですね。萌え萌えしたラブコメ的な要素以上に、楽しめます。イラストは、女の子ばかり描いているくらいありますが。

アニメでは是非、バスケ要素に力を入れて欲しいものです。

## その61 「恋する鬼門のプロトコル 第二、二巻」

良くも悪くも作者の趣味でんこ盛りな放課後ファンタジーです。

「恋する鬼門のプロトコル」（出口きぬごし／アスキー・メディアワークス 一巻初版：2010年6月10日）

幽霊が見えるという特異体質の少年、和泉葉介。彼はその体質により幼いころより周りから変人扱いされていた。高校入学を機に普通の青春を謳歌しようと思気込む葉介だが、クラスメイトに異様な霊気を放つ少女がいた。新美たまもという名のその少女は、本人こそ己の特異さを自覚していないようだが、葉介にとっては異質な存在であり、大事な平和を乱す元凶にしかないのであった……

登場人物が皆個性的です。僕はメインヒロインのたまもが好きですね。純情だけど暴走しがち。「ウヒョオオオ」とか「ムキョオオオ」とか叫ぶ、そんなヒロインです。彼女の心理描写がおもしろいです。実際にいたら、ものすごく面倒な性格でしょうけどね。

一応ラブコメということになっていますが、ストーリーにはシリ阿斯な面もあって、そこは好きでした。しかし説明不足かなと感じる場面もいくつか。もう少し丁寧に書いてほしかったかな。作者の好きな要素を詰め込んで、勢いで展開していった。そういう印象を受けました。

文章について。一巻の前半は、はっきり言ってかなり読みづらい

です。縦書きの小説で「w」や「k w s k」といったネットスラングを使う（地の文に普通に出てきます）のは、ちよつと変かな。他の箇所も、なんかぎこちなかったりしました。第二巻ではそれが改善されて、ずいぶん読みやすくなっていました。一巻のあとがきで作者も言っていました。あら削りなところはあるかもしれませんが、ちなみにこう続きます「そのあら削りも楽しんでもらえたら幸いです」作者がこれを言っちゃダメじゃないかな。

さつきも書きましたが、好きな要素を詰め込みすぎた感が否めません。それを消化しきれなかったから、どこか変になってるんじゃないかな。キャラの設定はいいのですから、話の構成をもっと考えてくれたらもつと良作になったはず。そういう意味で、とても「おいしい」作品でした。

来月には第三巻が発売とのこと。問題点が改善されていることを期待します。

## その62 「私のおウチはHON屋さん 第二巻」

小学生がエロ本を売るマンガの続刊です。「私のおウチはHON屋さん 第二巻」(横山知生/スクエア・エニックス 初版発行：2011年1月22日)

エロ本がテーマですが、この本自体は全年齢対象です。そして、なかなかおもしろいです。みゆちゃんがかわいいです。

この巻から登場するレギュラーキャラがいます。ツリ目でツンデレ気質の小学生で女の子。主人公のみゆをライバル視する彼女も、またエロい本屋さんの店員です。いえ、この世界ではこういうことが普通にあるとか、そういうことではないんですけどね。ことの経緯については、実際に本を読んでください。

それにしてもみゆちゃん、実に有能な書店員です。売っているものはエロ本ですが、どの書店においても見習うべきことはあります。それは、お客さんの立場で考えてどういう本を欲しがっているかを察する、ということです。

折しも不況の世の中。出版業界もその影響を受けていることでしょう。あるいはアマゾンなどの通販システムに、書店は客を奪われているかもしれません。電子書籍なんてものも登場しました。それらの影響がいかほどのものかという議論は差し置くとしても、書店は生き残りの方法を模索する必要があるから出でくるでしょう。つまり、いかにして本を売るか、です。

話題の本を前面に出す。いい方法です。話題の本ですから、買う人も多いでしょう。普段本を読まない人でも買つかもしれない。そういう商品を目に付く場所に並べるのは有効な戦略です。

POPを作って宣伝をする。これもいいですね。有名ではない本でもお客さんに知ってもらえます。自作するわけですから、個性を出すこともできますね。

しかし問題は、上の二つはもうどの書店でもしていることです。やるのは結構なことですが、やっただけでは個性が出ないです。POPにしてもそれは同じで、他とは傑出して違うものを作るというのはなかなかできるものではありません。

そういえば、ただ書店とだけ言って、その規模とかについては言っていないですね。僕個人としては、規模が大きければ大きいほど好きなんですが、ここでは大きい書店については考えないことにしましょう。大きいところは体力がありますし、お金を使ってなにかイベントを企画したりもできます。それによって集客をはかることができるので。問題は、小規模書店。個人経営の本屋さんです。

こういう書店は、まず売り場面積が少ないです。上で言った、話題の本を前面に出して売る方法を取ったとして、それだけで多くのスペースを占領されることになります。他の本を置く場所は限られてきます。そのせいで他の本の品ぞろえが乏しくなる。これは絶対的な面積の差によって生まれることですが、一番の違いです。あるいはPOPを作るにしても、さっきも言った通り他の店のものよりいいものを作るのは難しいです。

では、なにをすべきなのか。この本にはその答えが描かれています。お客さん（常連さんがいれば特に）と積極的に関わり、嗜好と求めているものを知る。そして商品である本のについてもよく知ってお客さんの求めに最適な本を渡す。これは簡単なことではないでしょう。しかしできたならば、実に効果的なことです。この作品の中で描かれているように。

なんか語ってしまいましたが、全国の書店員さんは、みゆのことを見習うのも、やってみる価値があるとそう思ったわけです。

### その63 「少年メイド 第四巻」

シヨタです。半ズボンメイド少年のお話、第四巻です。「少年メイド 第四巻」(乙橘/エンターブレイン 初版発行：2011年3月11日)表紙の千尋くん、ちよつと寒そうですね。コートにマフラーと防寒装備にもかかわらず半ズボンを貫き通すのはさすがです。

この巻では、クリスマス年越しバレンタインデーと、冬のイベントが主に描かれています。ほしかったもの(掃除機)をもらって大はしゃぎで大掃除をはじめたり、年越し旅行へ向かった別荘内でも家事をしないと落ち着かない様子をみせたり。どこまでもメイドな千尋くん。あるいは、メイドではない小学生としての千尋くん。どっちもかわいいです。ようするに、千尋くんはかわいいです。何を着ても、何をしていてもかわいいです。かわいいなあもつ。

バレンタインデーの話が特に好きでした。別にBLな作品ではないので、女の子が思い人にチョコを渡そうとがんばるお話となっています。女の子とは、唯一の女性のメインキャラである美耶子さんではなく、新キャラである乃村という千尋のクラスメイト。好きな人とはもちろん千尋のことで、引っ込み思案の乃村の奮闘がいい感じでした。

ところでこの作品、次の第五巻で完結するんじゃないかって思うんです。結構な確証を持って。バレンタインデーということは千尋

くんが小学校を卒業する日が近いということですし、クライマックスに向けた伏線がいくつか見受けられます。もちろん決まったことではないのですが。

完結するとしたらすこし辛いですが、このままきれいに終わるというならばそれもいいでしょう。最後をいろいろ予想しながら、次を待ちます。

## その64 「イエローゲート 第二巻」

この紋所<sup>バンツ</sup>が目に入らぬか!? 美少女な水戸黄門マンガの第二巻で、完結編です。「イエローゲート」(森みさき/メディアファクトリー 初版発行:2011年1月31日)ま、一発ネタで終わってしまいそうな雰囲気は出ていましたが。打ち切りなのかどうかはわかりませんが。

前巻で不穏な動きを見せていたクラスメイトの中村。彼女の正体は仕事人、中村主水だった。その攻撃をなんとかしのいだ光國たちだったが、今度は主水の雇い主が直々に接触を図ってきた。彼女こそ、光國の最大のライバル、徳川義宗だった……。

ま、所詮は萌えが目的な作品なので、あんまり身構えることなく読みましょう。ストーリーはありがちな展開で、最後まできれいにまとまっていました。二巻で終わるからといって要素を詰め込みすぎる感ありませんでした。

女の子が闘うジャンルのマンガが好きという人には、読んでもらってもいいと思います。しかただひとつ奇をてらっているネタ以外に特別変わった要素もないので、大しておもしろくないという感想も抱くかもしれません。そういうものでしょう。女の子は可愛いと思うので、買って損はしない。でもそんなにおもしろいわけではない。そんな評価でしょうか。

## その65 「はたらく魔王さま！」

第17回電撃小説大賞銀賞受賞作です。「はたらく魔王さま！」  
(和ヶ原聡司/アスキー・メディアワークス 2011年2月11日)

他の受賞作も同時に出版されていましたが、とりあえずこれだけ買いました。

魔王サタンは、聖十字大陸エンテ・イスラの完全支配にあと一歩というところまで迫っていた。しかし勇者を名乗るひとりの人間によつてそれは阻止され、逆に魔王が追われる立場となる。いよいよ討たれるというその瞬間、魔王の腹心アルシエルの手によつて異世界への扉が開かれた。扉に飛び込んだ魔王とアルシエルがたどり着いた場所、それは現代の日本だった。

冒頭、魔王が日本に来てからその環境になじむまでがテンポよく書かれています。来てから本編に至るまで、作中で実に一年の時間が経っていて、書かれている事象も多いのですが、だれることなく書ききっていました。

魔王の貧乏生活がおもしろいです。ボロアパートでアルシエルとのふたり暮らし。唯一の収入源は魔王のバイトによる。そのため台所は火の車。些細な買い物をするにも部下と口論になり、バイトの自給アップに狂喜する。とても世界を支配下に置こうとしていた人物と同じには見えません。

実際、この世界に来てからの魔王は傍から見るといい人です。自給アップも日ごろの優秀な接客態度のたまものであり、職場での人

間関係も良好。いい上司とかわいい後輩がいる。目標は正社員に格上げになること。いつかはエンテ・イスラに戻り世界征服を再開するつもりなのですが、普段のふるまいからはそんなことを考えているようには見えない。

一方の勇者も魔王を追って日本にたどり着いていた。ヒロインたる勇者は、魔王よりもずっと給料のいい仕事についていて、いい生活を送っている。友達もできた。しかし勇者には魔王討伐という使命が合って、また帰るべき場所もあった。

全く違う世界にきた魔王と勇者。価値観の異なる世界での生活は、ふたりを変えていきます。その変化こそが、この話の重要な点ではないのかなと。

全体的にコメディタッチで書かれていますが、終盤になるにしたがつてシリアス成分が強くなっていきます。最後ご都合主義とも思える展開もありましたが、魔王の性格がそれもアリかなって思わせられます。本当によくできたキャラです。

あと、あとがきが秀逸だと思いました。ここだけでも読んでみることをお勧めします。

## その66「ヨルムンガンド 第九集」

武器商人ココ・ヘクマティアルとその私兵達の物語、その最新刊です。「ヨルムンガンド 第九集」(高橋慶太郎/小学館 初版発行：2011年3月5日)なかなか新刊がないなーと思ったり、出たら出たらで書店には特装版(ドラマCD付き)しか置いてなくて、やっと手に入れた通常版です。ドラマCDは興味ありますが、高いんですね。

せっかくなんで特装版の説明をしておきましょう。読者アンケートで選ばれたエピソード「ムジカ・エクス・マキーナ」(第二集掲載)をドラマCD化したものがついています。パンツはいてない殺し屋の女の子が出てきた話です。

ではこの本の話に。これまでの巻では、表紙はココと私兵のうちのひとりのツーショットの形をとっていました。この巻では九人目で最後のひとり、ワイリです。

前半ではワイリの過去と活躍を描いています。普段目立たない彼ですが、なかなかクレイジーな一面を見ることが出来ます。それこそ、主人公ヨナが怖がるくらいに。一方で、怖がられたかもしれないと落ち込むという面も見せてくれるワイリ。ヨナもワイリもかわいいです。

後半は、ココとその親友南博士の考えているらしき「計画」についてのお話。その全容はわからないまでも、計画の名前が明らかにまりましたそれが「ヨルムンガンド」世界蛇の名を冠するこの計画とは何なのか。既に探りを入れココに接近する者、あるいは危険を感じたのか距離を取ることを選ぶ者。中身は不明ですが、きっと驚

くべきものなのでしょう。

南博士は、昆虫の蝶が好き。空が飛べたらと言うシーンもありました。翼を持たぬ世界蛇は、海と地上を食らい尽くしても空だけではどうすることもできない。本の扉にそう書いてあります。では、蛇が翼を手に入れたらどうなるのか。興味は尽きません。次の巻も楽しみです。

## その67「アットホーム・ロマンス 全三巻」

皆さんに質問です。あなたは姉派ですか、それとも妹派ですか？  
ちなみに僕は姉派です。

……って、なんか唐突な質問でしたね。しかも、実際に姉妹がいる方にはあんまり意味の無い質問でした。ひとりっ子や男の兄弟しかいない人にとって、姉や妹というのは未知で幻想的な世界の物であります。たとえば実際は違っても、妄想ぐらいはいいでしょう？

で、僕は姉派です。姉好きです。姉もいないのにシスコンです。そして全国の姉好きに読んでほしいマンガがこれです。「アットホーム・ロマンス」（風華チルヲ／芳文社 一巻初版：2007年9月11日）全三巻で完結済みです。

守村家は夫婦と姉弟という家族構成の、どこにでもある家庭……ではなかった。元プロレスラーの勇は、引退後に開い道場の経営に失敗、自信を喪失して半ニート状態になっていた。また弟の竜次郎は目に余るほどのマザコンで、ふたりの将来を案じた母の明美は、あえて家を出ることでふたりに立ち直ってもらおうとする。ところが姉の暁子もまた、強烈なブラコンだった。母というストッパーがいなくなった守村家で、竜次郎と暁子の暴走が始まるのだった。

勇次郎と暁子、そして母親の三角関係を中心としてまわりの人間を巻き込んだドタバタコメディです。登場人物のほとんどがこの姉弟と同じく近親者に対する異常な愛情の持ち主で、彼らはそれを隠そうともせずバカなことを言ったりやったりします。一部を除いて

登場人物みんなバカです。そんなキャラが次々にたたみかけるよう  
におかしなことをしていく。勢いがあってよかったです。

しかし本作は、変態性と勢いだけで進めているわけではありません  
ん。いつも通りのバカなやりとりの中に、どこか深刻なテーマが隠  
れていたたり、あるいはふとした拍子にそれが表面化したり。弟を「  
好き」とはどういう意味か、普通の「好き」となにが違うのか。ま  
たは、あるべきマザコンの形とはなにかなど、答えがあるのかどう  
かさえわからない疑問に直面して、悩んだり暴れたり。そのたびに  
周りに助けられながら答えを模索していく。

全三巻、読み終わったらきつと思うことでしょう。「家族っ  
てすばらしい」

萌え四コマのジャンルに入る作品ですが、ただ日常を描いている  
だけの他の作品とは一線を画した、名作だと思います。是非読んで  
ください。

## その68「パタリロ！ 第八五巻」

少女がほとんど出てこない少女マンガにして長寿作品の最新刊ですよ。「パタリロ！ 第八五巻」（魔夜峰央／白泉社 初版発行：2010年11月10日）これが発売されたのは下宿先で知っていたのですが、どうせ実家を買っているでしょうで買わずにいました。そして今日読みました。

今巻も推理ありSFありと、バラエティに富んだ話が収録されています。まあ、基本はコメディなんですけどね。個人的には冒頭の話が好きでした。推理物で心温まる話で、伏線の張り方が見事でした。

そしてこの巻では、懐かしいキャラの息子が出てきます。初期の話で出てきてしばらくご無沙汰していた「警察長官」の息子、その名も「ノムスコ」です。なかなかぶっ飛んだキャラを見せてくれました。もうひとりが「氷のミハイル」とある国の諜報部員。彼が主に登場した時期は、まだソ連が存在していた頃です。ずいぶん昔のことですね。当然僕はまだ生まれてない頃です。

あ、「バンコラン菌」なんてのも出てきました。これもファンには嬉しいものです。

そして、「This man」という話が収録されていますが、この話は少し怖い、というか不気味でした。時々こういう話があるのもまた魅力なのですが。

もちろん、この巻から読み始めても十分おもしろいと思える話し

ばかりです。歴史が長いシリーズですが、おもしろさは昔からかわっていません。じやなきや、85巻も続きませんね。

## その69「メグとセロン? 第四上級学校な日々」

キノの旅の作者が送る、学園冒険コメディです。「メグとセロン? 第四上級学校な日々」(時雨沢恵一/アスキー・メディアワークス 初版発行:2011年3月10日) さっきこの本のジャンルを学園冒険コメディと書きましたが、たぶん違います。学園でも冒険でもコメディでもあります、どれが主要なのはよくわかりません。日常ものつてという言葉も思い浮かびますが、この人達の日常ってそこまで日常的でもないんですね。

まあいいや。内容の紹介から。今回はいつものような長編ではなく、書き下ろしの短編がふたつ中編がふたつ収録という構成になっています。

まず短編から。恒例といえば恒例の、電話での会話だけで状況を把握させるという手法のお話。いつもはプロローグに使われていますが、今回はキャラクター紹介を兼ねているようでした。もうひとつの短編は、新聞部の顧問が決まったという話。ほんとうにそれだけの話ですが、これの重要な点はニツクの視点で書かれてること。この人が普段なにを考えているのかはなかなか読みとれないから、こういう話は貴重です。

中編ひとつ目は、新聞部のメンバーが部活動オリエンテーションに参加して一位を目指すためにがんばるというお話、をきっかけとして我々が部長のジェーニーの過去を探るというもの。第四巻の時点でなにかあったと思わせておいた伏線が、ここで回収された形になります。過去のつらい経験が今に生きる、というか主人公のセロンの今につながる。別行動をとっていたセロンとすれ違いざまに思いのたけをぶつける場面は、シリーズ屈指の名シーンだと思います。

もうひとつの中編ですが、「あなた」（名前や詳しい人物像は明かされない。この作者の作品ではよくあること）が田舎の学校から短期留学生としてセロン達の学校にやってくるというものです。期間限定で新聞部に入部した留学生が首都の大きさや豪華さに圧倒される。都会を初めて見た人間の驚きや感動がよく表現されています。

そして最後に、次巻に繋がる大きな伏線を残して、この巻は終わっています。次の巻が出るのはまた一年後ですから、じらしてくれますね。

ちなみにあとがきは、ここ数年続いていた「巻末恒例あとがきブログ」ではなく、「セグとメロン」なる短編でした。本編とは一切関係ありませんが、これはこれでおもしろいですよ。

その70「ストライクウィッチーズ 公式コミックアラカルト」いつしよにでき

ストライクウィッチーズの関連書籍ですよ。「ストライクウィッチーズ 公式コミックアラカルト」いつしよにできること」（角川書店 初版発行：2011年2月26日）タイトルが長いです。以前に紹介した「ストライクウィッチーズ 公式コミックアラカルト」というアンソロ本の第二弾的な本でしょうか。そうです。感想が書きにくいアンソロ本ですよこれは。

とはいえ、中身を見てみるとなかなか良い作品ばかりでした。第一弾は、話はともかく絵柄が好みじゃないのがいくつかありました。が、この巻はみな好きなものでした。

話の内容としては、だいたいがお気楽ギャグ日常話ですが、時々まシリラスだったり良い話だったりのがはさまれています。

そして、第一弾で出てきて好評だったらしい、「小さいサーニャ」（小さなサーニャ）の話がいくつか挿入されていました。どうやらこれ、どこかの雑誌に連載されているらしいです。たぶんこの本は、小さいサーニャを収録するために発行された、というところもあるんじゃないかな。ちなみに小さいサーニャは今も連載継続中なので、今後このようなアンソロ本が発売されるかもしれませんね。

## その71「進撃の巨人 一〇三巻」

宝島社の発行する「このマンガがすごい！」（「このミステリーがすごい！」とか「このライトノベルがすごい！」のマンガ版）の2011年オトコ編で第一位をとった作品です。「進撃の巨人 一〇三巻」（諫山創／講談社 一巻初版：2010年3月17日）

いまのところ第三巻まで出ていて、明日、第四巻が発売されます。

「巨人」それはある日突然現れ、いとも簡単に人類を滅亡の危機に追い込んだ。生態も行動原理も不明、ただただ問答無用で人間を捕食する巨人に対して人類は対抗する術を持たず、巨大な壁を作り巨人の進攻を阻むことしかできなかった。壁に囲まれた場所で、外への自由と引き換えに安寧を得た人類。しかし平和は長くは続かなかった。人々がその脅威を忘れかけていた頃合いを見計らったかのように、巨人は壁を破り姿を現した。

巨人に対抗するする軍隊のような組織「兵团」の一員、エレン・イエーガーを主人公にして、幼馴染ふたりや他の仲間たちの戦いの物語です。

しかし、戦いと言ってもその内容はひどく一方的です。巨人を倒す方法はあるが、そうだとっても巨人は強力であり人間がかなう相手ではない。果敢に挑むが、あっけなく敗れ、食われる。絶望的なまでに不利な状況。どうあがいても死ぬしかないという恐怖。それが読者にもひしひしと伝わってきます。本当に、絶望しか感じられません。そんな展開です。

それでも負けないのが人類の強み。絶望の中でなんとか活路を見出し、諦めずに立ち向かい……そしてまた絶望する。それでもまた立ち上がる。絶望と希望の描写がうまいです。そして圧倒的に不利な状況にあっても戦う人類のすがたが、熱いんですよ。

ストーリーについては申し分ないと思うんですが、問題を挙げるとすればやっぱり絵でしょうか。なんというか、下手です。味があるとかそういうのじゃなくて。そこが好きじゃないです。キャラの書き分けがうまくできてないんですね。主要キャラはいいんですが、モブキャラの見わけがまったくつかなくて、「あれ、こいつさつき死んでなかったか？」とか、そんなことを何度も思いました。

ただ、巨人についてはいい感じでした。絵柄に合っているのかはわかりませんが、人の姿をしていながら人ではない、巨人の不気味さがよく表されています。

さきほども述べましたように、最新第四巻は明日4月8日発売です。話にまだ謎な部分が多く、また一話一話の構成が見事で続きが気になるような描き方をしているので、非常に楽しみなところです。明日買って、また後日書評を書くことにしますよ。

## その72「進撃の巨人 第四巻」

発売日に買って、今から書きます。「進撃の巨人 第四巻」（諫山創／講談社 初版発行：2011年4月8日） どうでもいいことですけど、この初版発行日の表記、本の表記をそのまま書いてます。実際の発売日とずれていても本の方が優先です。古い本だと発売日を調べるのが大変ですから。

そうですね、気付いてるひとも多いでしょうがこの初版発行表示ってたいてい、発売日よりも未来になってます。なんでそうなっているのか、少し調べてみたら、先の日付にすることで少しでも店頭に置かれる時間を長くするため、らしいです。要するに「サバを読んでも」わけです。で、この本はちゃんと発売日と発行日の表記が一致していましたということです。ちなみにアスキー・メディアワークスの本も一致させています。

では感想です。この巻は過去編といいますが、主人公エレンをはじめとする訓練兵団の訓練の様子、あと内面や交流を主に書いています。第一巻で名前だけ出てきて、その後いまいち印象に残る動きをしていない（というか、キャラの書き分けがいまいちなので誰がなにをしていたのかわかりにくい）キャラ描写を行っています。それぞれに特徴や思想を持たせていて、今度はしっかり印象付けられていると思いました。その上で一―三巻を読むと、また新しい発見があるかもしれません。

反面、ストーリーの疾走感は、今までに比べると失速したかなと

思えました。今までは先の読めない展開でぐいぐい引っ張っていくような話ですが、この巻だけなんだか異質なものを感ずます。ただし今後が続く布石という位置づけなのでしょう。

最後は時系列が現在にもどり、また話が動きそうな様子で終わります。次に期待、ということでしょうか。

### その73「魔法少女まどか マギカ 第一、二巻」

普段からラノベとかマンガのことを書いておいて言うのもなんですが、深夜アニメってあんまり観ません。いえ、別にオタクきもいとか、そういうことじゃないんですけどね。ただ、観る時間がなくて。全く観ないってわけじゃないですしね。ちなみに今期は、「星空へ架かる橋」って言う『アニメだけ観ます。エロゲ原作のアニメですね。』

興味自体はあるんです。なのでアニメの内容について断片的な情報を知ってたりするんですよ。でまあ、観たいアニメもあるんですよ。そういう時どうするのかというと、そうです。原作を読むんです。

というわけで今日はこの本「魔法少女まどか マギカ 第一、二巻」(作画：ハノカゲノ芳文社 一巻初版：2011年2月27日)正確には原作ではなくコミカライズです。アニメが先に放送されてそれをマンガ化するんですね。

このアニメ、その内容からかなり話題になりましたね。一世を風靡した、とでもいいますか。現在第十話まで放送されて、地震の影響で最終二話が放送されないまま放送期間が終わってしまっただけ二話連続で放送されるそうですよ。

このコミカライズはアニメの放送に沿って出版されているので、これの最終第三巻もなかなか出ない状況だったらしいです。ま、そのうち出るでしょう。

なにがそこまでこの作品を人気にさせたのか。一見のどかかわいらしい絵と正統派でヒロイックな序盤のストーリーで単なる萌えアニメと見せかけておいて、いきなり残酷な展開を見せつけ視聴者を絶望へと叩きこんだその話の進め方でしょうか。見た目がゆるくて中身が硬派って展開に、好感を持つ人は多いと思いますよ。それに、こういう話のほうが続きが気になるものですし。

あらすじについてはアニメを観てください。簡単に言うと、中学生の少女が「キュウベえ」という謎の生物によって魔法少女になって、数奇で過酷な経験をするってのです。

このコミカライズについて、ストーリーはアニメと同じらしいですが、グロ描写がより直接的になっています。アニメじゃ首の無い死体なんて直接写せませんが、こっちではしっかり出てきてますよ。血とかもダクダク出てますよ。

キュウベえは、より可愛らしく描かれています。だからこそ実際にやってることとの対比が際立つというか。

ストーリーは散々言われてきたことですが、鬱で暗いです。悲劇が好きだって人は読むべきでしょう。

まあ、あんまり書くことはありません。アニメを観てる人も多いでしょうから何書いてもいまさら感が漂うんですね。でもおもしろい作品ではあると思いますよ。このサイトでも、二次創作書いてる人がけっこういますね。

その74「はい、こちら探偵部です 第一、二巻」

推理小説って、あまり読んだことがありません。まったく興味がないというわけではないのですが、なんか縁がないんですね。ちなみに、いつか書こうと思う題材ではありません。

「はい、こちら探偵部です 第一、二巻」(似鳥航一／アスキー・メディアワークス 一巻初版：2010年10月10日)は、タイトルから察することができるよう探偵ものです。推理物とは、なんか違う気がするんですが。

主人公の山岡迅朗は稀に見る濡れ衣体質で、ほぼ日常的に犯してもいない罪を着せられていた。お金持ちが大勢通うお嬢様学校に入学することになったが、そこでもさっそく身に覚えのない傷害事件の容疑者にさせられた。

周りから疑いの目を向けられる迅朗が頼ったのは、探偵部なる怪しげな部活。その部室へ訪れると、中にいたのは気弱そうな女の子。話を聞くと、探偵はやり手だが人前に姿は絶対に見せず、助手である彼女を通して捜査を行うとのこと。

胡散臭さ満点だが、迅朗の無実を証明してくれるという。迅朗は疑いながらも、少女と一緒に事件の真相の究明に乗り出すのだった。

推理ものというよりはラブコメ要素の方が目立っている気がしま

す。それもお嬢様系（そういうジャンルがあるのかどうかはよく知りませんが）のラブコメです。放課後にお茶会したり、そういうイメージです。メインヒロインが非常におっとりとした性格で、また主人公も濡れ衣を着せられるのに慣れていて大抵のことは笑って済まして耐えられる、なんてキャラなので状況と比べて雰囲気は緊迫感がないんですね。そういう作風を狙ってるんでしょうけど、推理物の空気としてはちょっとそぐわない気がしました。例えるなら夏のむわっとした蒸し暑さ、あるいは甘ったるい香りの漂う濃い霧の中にいるような。読んでいてそんな感覚を覚えました。

事件や推理の内容もそれほどシリアスなものではなく、全体的に推理物としての緊迫感が欠けているような気がします。そういう作品として書かれてるんでしょうけど、僕には合わなかった。そういうことでしょうね。

ちなみに上記のことは特に第一巻に顕著で、第二巻は少し雰囲気が変わったって感じはしました。少し（ほんの少し）推理要素も練られてましたしね。これからどういう路線に行くかは、わかりません。

推理ものをあまり期待せず、お嬢様の出てくるラブコメとして読めばたのしめると思います。

## その75「学園キノ 第一巻」

今日の本は学園キノの第一巻です……と書くと、この前第四巻紹介してたじゃんとかそんなことを言われそうです。まあそれはその通りなわけで、ではこれはなんなのか。実はこれ、コミック版なんです。

「学園キノ 第一巻」（作画：電脳桜蛙団 原作：時雨沢恵一／アスキー・メディアワークス 初版発行：2011年2月26日）電撃文庫で第四巻まで発売されている学園キノをコミック化した本です。アニメ化に向けての布石……ではなさそう（原作の巻数がすくないので）ですが、人気が高いゆえのコミック化でしょう。

原作は「キノの旅」のパロディ的な位置づけで、キノをはじめとした原作のキャラが日本の高校生になるというお話です。キノは実は変身ヒーロー「謎の美少女ガンファイターライダーキノ」で、学園を襲う謎の魔物と日々戦いを繰り返す。ただしジャンルとしてはコメディに分類されると思います。

ストーリーは原作と全く同じで、この巻では原作第一巻の半分ぐらいまでが収録されています。原作を読んでも人間にとってはとても半端なところで終わっているのですが、マンガで独立した作品として読むと非常に見事な引きである、そういう違いがなかなかおもしろいです。

絵は良いと思います。学園キノのキノはキノの旅のキノよりも女の子らしさが強調されているのですが、その可愛さをよく表せています。キノ可愛いです。そしてシズかつこいいです。

惜しむべきは、本編よりもおもしろいとされる「あとがき」まではコミック化されていないことでしょうか。いえ、別にいいんですけどね。コミック化なんて無理だとは思いますが。でもあとがきがおもしろいんですよ。そういう意味では、原作を超えることは難しかもしれません。でもキノかわいいですよ。

原作とコミックでは、やっぱり原作の方がお勧めです。でもこちら  
も、買って損はないと思いますよ。

## その76「夢喰いメリー 一〇六巻」

アニメの原作ですね。「夢喰いメリー 一〇六巻」(牛木義隆/芳文社 一巻初版:2008年11月11日)アニメは観ていないのですが、気になったので買いました。

人の夢の内容を見るという能力を持った高校生、藤原夢路はある日、「幻界<sup>ゆめ</sup>」の世界から「現界<sup>うつろ</sup>」に迷い込んだという少女メリー・ナイトメアに出会い、危ないところを助けられる。メリーの話によると、彼女は長い間、幻界に戻る方法を探しているが一向に手がかりが見つからないという。正義感の強い夢路はメリーの手助けをすることを決意し、共に行動するようになる。

絵柄、ストーリー共に好きな部類です。そしてヒロインがみんなかわいいです。男キャラも、かつこよかったり。キャラが(端役であつても)それぞれ個性を持っていて、魅力的でした。

主人公ふたり、夢路とメリーのコンビがいいです。メリーの正体や、夢路の体質などに謎が多く、お互いに素性ははっきりしないのですが、それでも信頼し合って一緒に戦う。こういう関係が好きです。

描写が丁寧で、アクション系の作品でままある、雑な書き方をし何が起こったか読者にわからない、という現象を起こすことはありません。それでいて話を引きのばすということもしていません。話の書き方が上手いですね。

## その77「虐殺器官」

読む人みんなが名作だつて絶賛するような作品です。「虐殺器官」  
(伊藤計劃／早川書房 初版発行：2010年2月15日) ちなみにこれは文庫版で、単行本は2007年6月に出版されました。

作者の伊藤計劃はゲーム「メタルギアソリッド」の熱烈なファンで、製作者小島秀夫をして「一番俺の作品を分かってる男」とまで言わしめるほどでした。メタルギアソリッド4の公式ノベライズも書いています。非常に文章のうまい人で、いきなり物語に引き込まれるような、文章を書きます。

惜しむべくは、長編を三つと短編を数個書いただけで病でこの世を去ったことでしょうか。惜しい人を亡くすとはまさにこのことです。

米国特殊部隊所属のクラヴィス・シェパードは、虐殺行為が行われているとされる国へ潜入し虐殺を指示する大臣とそれを支える正体不明のアメリカ人の暗殺任務を受ける。任務は滞りなく進んだ。アメリカ人には逃げられたが大臣を殺害することはできた。しかし大臣の最後の言葉はシェパードに疑念を抱かせるた。「わたしはなぜ殺してきた」大臣は、なぜ自分が虐殺を行ったのかを理解できていなかったのだ。

なおも世界で虐殺は続く。どうやら、取り逃したアメリカ人「ジョン・ポール」が関わっているらしい。シェパードとその同僚は、ジョンのいるとされる場所、チェコのプラハへと向かう。

本書は、初めメタルギアシリーズの同人作品として構想されていたものをオリジナルな作品に改編したものです。なのでナノマシンによる兵士の制御やオクトカムスーツなど、見覚えのある技術が多く登場します。

また世界の情勢や科学技術、あるいは文化などが物語に深く関わっているのも良いです。こういうのって、知識が深くないと書けないものです。そこらへんもMGSシリーズに共通するところでしょうか。

動画サイトで映画を見て、ドミノピザを食べる。コメディ番組「空飛ぶモンティ・パイソン」(昔のイギリスの有名なお笑い番組。イギリス版「笑う犬の冒険」と言えばわかるかもしれない)に出てくるジョークで笑う。そんな日常と虐殺が行われているような戦場は似ても似つかないものですが、同じ世界での出来事です。そして一見平和な日常のオブジェクトであったとしても、それについてよく調べると、穏やかではない非日常が透けて見える。そういう話が一番印象に残ったのですが、この本で語られる話はそれですべてではありません。

この本のテーマがなんなのか、考えればいくつか思い浮かびます。たぶん僕が気付かなかったのもあるでしょう。となると、人によって読んで受ける印象は違うんでしょう。

もちろん娯楽作品としても楽しめます。おもしろい軍事アクションものとしても名作です。構想があれなので、メタルギアソリッドの二次創作を読んでも気分にもなります。そして、メタルギアソリッド好きにとってもよく練られた作品ですよ。

## その78「テルマエ・ロマエ 第三巻」

風呂とローマがテーマのマンガ第三巻。映画化も決まって絶好調です。「テルマエ・ロマエ 第三巻」（ヤマザキマリ/エンターブレイン 初版発行：2011年5月7日）

前回のラストでは「ルシウス死ね！」みたいなことをつぶやく謎の人物が現れました。そしてその言葉通りに命を狙われることになるルシウス。どうするルシウス。まあそんな感じのお話でしたが、しかしルシウスができることは風呂を作るだけ。基本的にいつもの調子で話が進みますよ。

ただし、今まではすべて一話完結な話だったのが、この巻では数話にまたがった話ができます。まあ、その方がストーリーに厚みが出てくるのでいいんですけどね。

そんなことより、映画化です。実写映画で、主演が阿部寛さん。ルシウス役でしょう。ローマ人ではないのが残念ですが、日本人から起用するならば最適じゃないかなとも思います。そしてヒロインに上戸彩さん……………ヒロイン？

このマンガ、ヒロインと呼べる人物は一切出てこないです、おっさんしか出てきません。

製作者が華がほしいと設定したキャラなのでしょうが、実写化した作品をつまらなくする要因として、原作にない余計なキャラを出すというものがあります。変な出来にならないかが心配です。

ヒロインの役どころは、マンガ家を目指す日本人とのこと。日本にワープしたルシウスがヒロインとドタバタなコメディを繰り広げて、それでルシウスが帰った後、ヒロインが「テルマエ・ロマエ」というマンガを完成させる。そこまで想像が이었습니다。たぶん正しいと思います。

## その79「よめせんっ！ 第四巻」

嫁を千人集めるといふ神様と、それに振り回される人間妖怪たちの織り成すハートフルラブコメディ、最新刊です。「よめせんっ！

第四巻」(マサト真希/アスキー・メディアワークス 初版発行：

2011年5月10日)

今回は、第一巻から登場するメインキャラクターで、千歳の大蛇の化身にして見た目が幼女な妖怪、夜刀です。第二巻で主人公広人の祖母との関係やら因縁やらについての複雑な心情が明かされましたが、それをさらに深く掘り下げられています。

また、第二巻、第三巻でメインだった元幽霊と妖狐の女の子も、この巻に継続して出てきて、ちゃんとヒロインっぽいことをしていますよ。話にそこまで関わってるかといえばそうでもないですが。なにをしているのかというと美薰っていう広人の幼馴染ポジションのヒロインと三人で広人の気の惹きあいをするという。なにが不憫って、第一巻から出ていて主人公の幼馴染っていうかなりおいしい立場にありながら途中出場のキャラと同列に扱われている美薰です。ちなみにこの三人では、僕は元幽霊のひかるが好きです。あのちよつと乱暴な言葉遣いがいいですね。

あとは、いつものように広人がかつこよかったです。いろいろな問題を抱えていながらもそれらを投げ出すことなくやり遂げる。家族の危機には身を挺して立ち向かう。なんて男らしい。

この本、実は一度発売が延期されていまして、もっと早く出版されるはずだったそうです、これは著者のせいではないのですが、ようやく出版のめどが立った時に、三月の地震が起きました。実はこの本の中には津波を想起させるようなシーンがあり、しかもそれはストーリー上絶対に外せない場面だったとのこと。著者は悩んだそうですが、ある決断をしたそうです。

……これは本書のあとがきにだけ書いてあることで、著者は自信のブログやツイッターでもこのことを触れておらず、読んだ人だけわかればよい、そういうスタンスでいるらしいのですが、この本「よめせんっ！ 第四巻」の印税を全て震災復興のために寄付することを決めたそうです。

著者のスタンスとしては、僕がここで明かしてしまうのはその男気を台無しにしてしまう気もするのですが、このことを皆さんにも知ってほしい。そう思って書きました。

皆さん、寄付とかそういう話以前におもしろい、買って損はない作品なので、買ってみてはいかがでしょうか。

## その80「メイのないしょ 第四巻」

女装少年マンガの、最終巻です。「メイのないしょ 第四巻」(日下皓/富士見書房 初版発行:2011年3月9日)表紙のメイはウェディングドレスです。一、二、三巻と巻を追うことに露出度が上がってきたのですが、最後はきれいな服装でした。

最終巻で完結編ですが、この巻で新キャラも出てきます。メイの伯父さんで、やっぱり女装趣味。この話に出てくる男はみんな女装するのか。まあ、風華の弟で生意気シヨタとかも出てきましたが。

で、ラブコメが完結したわけです。主人公が誰と結ばれるのかが少し気になりますね。なにしろ主人公は主人公であると同時にメインヒロインなわけですから、普通に女の子とくっつくことにもなにか違和感があるというものです。……………ま、そうは言っても風華とくっつくのが一番順当な展開なんですけどね。

予想通り風華エンドですが、大事なのはクライマックスにおける盛り上がりです。ふたりの愛を阻むなにかに、登場人物全員が立ち向かう。そういう盛り上がりです。そういう展開があつてそれなりにおもしろかったですが、いまいち心にぐつとくる話ではなかったです。なんというか、全体的に盛り上がり欠ける話でした。ま、メイがかわいいからいいんですけどね。

今回は趣旨は二シリーズ紹介しますよ。内容というか趣旨が同じなもので。「夢喰いメリー ストーリーアンソロジーコミック #1」(芳文社 初版発行:2011年3月27日) 「夢喰いメリー 4コマアンソロジーコミック #1」(芳文社:初版発行:2011年3月13日)そうです。感想が書きにくいアンソロジーです。その夢喰いメリーバージョンです。アニメ化記念でしょうね。#1というのは、第一巻という意味です。つまり次があるかもしれないのか。

芳文社って四コマをメインに出版しているイメージなのですが、夢喰いメリーは普通のコマ割りの作品です。ストーリーアンソロジーコミックの方は普通のマンガのようなアンソロジーもの。そして4コマアンソロジーコミックの方がけいおんとかの四コマ形式のアンソロジーです。書いてる人は、両方の本でかぶってません。

僕はアニメは観ていませんが、この本は原作の内容の発展で描かれたものばかりなので問題はありませんでした。……アニメは原作と話が違ったりするんでしょうか？

萌え四コマって、個性が無いってたまに言われますね。僕も、過去にそんなこと言ってるかもしれせん。ですがまあ、違いつてのは読んでみないとわからないものですね。あんまり数読んでるわけ

じゃないですが、読んでるうちになんとなく見覚えのある絵柄に出会ったりします。そんなとき作者の名前を見るとああやっぱり、とそういうことがあります。やっぱり絵の特徴ってのはあるんですね。それでも、皆さん萌え萌えな絵を書いてるマンガ家さんなわけです。どういふことかという、メリーちゃんかわいいということです。

## その82「恋する鬼門のプロトコル 第三巻」

暴走気味ヒロインとか幽霊とかハッキングとか、いろいろあるラブロメの第三巻ですよ。「恋する鬼門のプロトコル 第三巻」(出口きぬごし/アスキー・メディアワークス 初版発行：2011年3月10日)

新しい部員の加わった「超常現象研究部」のメンバーは、幽霊狩りをするために深夜の霊園へと忍ぶ込む。そこで出会ったのは尋常ではない霊気を持つ少年の幽霊。葉介にとりついたその幽霊は名前を綱吉といい、離れる様子が全くない。江戸幕府の第五代目将軍にとりつかれた葉介の運命やいかに……。

前にも書きましたが、たぶん作者の趣味らしいいろんな要素が詰め込まれていて、にぎやかだったり雑多すぎたりしました。こういうのって上手く書いていかないとひとつひとつの要素が印象薄くなりますね。とはいえ濃く書いてもそれはそれで読者は混同するのですが。

思ったのが、キャラの数が多いかもしれないということでした。この巻でも七人ぐらい増えてます。キャラが多くなると、読者も把握するのが大変になります(今の時点では大丈夫ですが、今後このペースで増えるならということです)まあ、死ぬキャラもいますし、個性的なのでそこまで心配することじゃないかもしれません。

文章力は、一巻の頃から確実に上がってると思いました。ストーリーも、一部の細かい点（未読の人にはさっぱりわからないだろうけど言うておく。あそこでガンダムは、ない）を除けば良いものでした。これ、東京の歴史的な事象からヒントを得てストーリーを考えてるんですね。一巻は彰義隊で二巻はM資金、この巻には徳川綱吉が出てきます。あと、浅草弾左衛門（被差別民衆の頭領）も登場しますね。その解釈というか切り口もいいと思います。改善点はありますが、続いてほしいシリーズです。

### その83「ロウきゅーぶ！ コミック版 第一巻」

アニメの放送も迫ったライトノベルの人気シリーズ、そのコミック版第一巻です。「ロウきゅーぶ！ 第一巻」（原作：蒼山サグ 作画：たかみ祐紀／アスキーメディアワークス 初版発行：2011年4月27日）

ストーリーはロウきゅーぶの原作とまったく同じで、原作第一巻の途中でこの科は終わっています。

絵柄は、原作のていんくるさんの絵とこちらを見比べたら、ていんくるさんの絵の方が個人的には好きです。しかしていんくるさんの絵って、動きのあるシーンを表現するのには向いてないとおもうんですよね。事実、原作の挿絵はバスケのシーンにはほとんど絵が描かれてませんし。その点こちらのたかみ祐紀さんの絵は、バスケを描くには問題ない作風だと思います。

ストーリーは原作と同じと言いましたが、マンガという表現方法ゆえか、展開が原作より早くなっている気はしました。もうすこしペース落としてもよかったんじゃないかな。気のせいなのかかもしれません。

ところで、僕がこのマンガで最も期待していたことは、原作で挿絵に登場しないキャラのビジュアルが見れるということです。原作では、慧心女バスケット部の五人以外の登場人物の外見が、ほとん

ど描かれてなかったんですね。例外としてはミホ姉と葵と、端役が数名。外見のわからないキャラの方が圧倒的に多いです。特に男性キャラにおいては、シヨタの夏陽くん以外誰も描かれていなかった。いつそすがすがしい差別ぶり！

しかしマンガではそういうわけにもいかず、というかいたって自然にキャラクターが書かれていた。そして、ついに顔がわかった主人公長谷川昂。まあ、だからといって特に感慨はないんだけど。それにしても夏陽くんかわいい。

## その84「私のおウチはHON屋さん 第三巻」

小学生がエロ本を売る話の最新刊です。「私のおウチはHON屋さん 第三巻」(横山知生/スクエア・エニックス 初版発行: 2011年5月21日)

今回もエロ本が関わる様々な人間模様が描かれていますよ。おっぱいとおしりがどっちが素晴らしいかで喧嘩したバンドマンとか、一切のエロいことが許せない教師とか。そしてそういう人たちに振り回されながら自分を見失わないみゆちゃんとか。出てくる人みんななんか変なキャラですが、とってもいい話にまとまってるのがいいですね。

この巻は、今まで登場していたキャラはほとんど出てきません。新レギュラーな虹沢さんの登場もなくてちょっと寂しい。新キャラはたくさん出てきますよ。また登場するかは微妙ですが。

あ、あと、巻末におまけとして、中沢書店の常連さん、国宮さんが主役の短編が掲載されていますよ。本編には一切の関係が無い話で、ちょっとメルヘンなお話でした。まあ、それを言うなら本編にもメルヘンチックな話がありました。それにしても国宮さんイケメンです。

## その85「戦場のハローワーク」

戦場カメラマンというと、去年テレビに散々出ていた渡部陽一さんを皆さん思い浮かべるかもしれません。あるいは世界的に有名な偉人、ロバート・キャパを連想する人もいるでしょう。戦場カメラマンとはその名の通り、戦場に行つて写真を撮るジャーナリストです。ということは銃弾の飛び交う中を駆け回りシャッターチャンスを探すとか、そんな危険なお仕事を思い浮かべたくなります。

実際はどうなのでしょう。そういう状況もあるにはあるらしいですが、そこまで危険なこともないらしいです。どういうことでしょうか。この本を読めばわかりますよ。「戦場のハローワーク」(加藤 健二郎/講談社 初版発行：2009年12月15日)ちなみに2005年に出版されたものを文庫化した本です。

フリーの戦場カメラマンである著者の体験記を書いたものですが、なんというか、かなりゆるいです。まさに戦場！ って場所の撮影の様子とかも書いているのですが、そうじゃないことも書いてあります。戦争の起こつてる国の女の子をナンパする話とか。ダイヤモンドの密売で儲ける離しとか。戦場取材する気があるのかとか言いなくなるようなことが大量にかいてあります。本当に書いてあるんです。しかしそういう機会で培った人脈が後々役に立つという話とかもあって、なにがどうなるかわからないものだっていう展開になったりします。(あくまで道楽でやってることで、役立たせようとかの下心はないらしい) まあ、それらの話がことごとくおもしろいのでそれでいいんですけどね。

戦場カメラマンという言葉からは想像できないほど平和でいいかげんな話が次々に出ています。まあそれはそうでしょう。戦争と言っても四六時中銃をぶっ放してるわけでもなく、そもそも戦争をやってる国にも普通に生活している人がいて、兵士たちも家に帰れば普通の人なんですから。なかなか呑気なものです。戦争は平和であるってのはさすがに形容矛盾ですが、そんな印象も受けました。

この本の作者が伝えたいことってのは、「戦場はおもしろい」ということでしょう。戦場でもその周辺でも、こんなに力オスでスリリングな場所はない。そして、そんな戦場に入るための方法や入ってからやるべきことが丁寧に、しかもおもしろく読みやすく書かれています。こんなにすばらしく楽しい仕事はないと、作者はそう言ってます。たぶん本当なんでしょう。そんな、これから戦場に行こうかなって思ってる人におすすめの本です。

## その86「日常 第一〜六巻」

アニメの原作も読むよ！　ってことでこの本「日常 第一〜六巻」  
(あらゐけいいち／角川書店　一卷初版：2007年7月26日)

アニメは絶賛放送中ですね。製作はあの有名な京都アニメーション。この会社のアニメって涼宮ハルヒの憂鬱しかまともに観たことがないので、放送するアニメがことごとく話題作になっている会社なので、このアニメも話題でもちきりなのでしょう、たぶん。

この本、ストーリーはあんまりありません。時定高校っていう学校に通う高校生やその周囲の人々が送る不条理でエキセントリックな「日常」をひたすら描くつてものです。いちおう主人公はいます。バカ元気な女子高生のゆつこと、同じく女子高生でロボットの東雲なのふたり。主にこのふたりの話が描かれますが、出てこない話もあります。

登場人物は多めですが、全員が全員個性が強いので埋没することはない、と。そして話の展開が全く予想できません。する必要もないでしょうが、予測不能のシニールなギャグが次々に襲ってくる。そういう印象でしょうか。

不条理ギャグというと合わない人には合わないでしょう。なに言ってるかわからない、意味不明と思う人もいるでしょう。そういう点で、人を選ぶ作品です。

アニメでは女の子が可愛く描かれてるみたいですね。まあ、原作でもかわいいんですが、ギャグ漫画なだけあって変顔というか、いわゆる「顔芸」が多いです。それもそれでおもしろいんですけどね。

## その87「ストライクウィッチーズ2　？空より永遠に」

アニメ、ストライクウィッチーズ2のノベライズです。「ストライクウィッチーズ2　？空より永遠に」(南房秀久/角川書店　初版発行：2010年10月1日)アニメはとうに終わっていて、この本も出版されたのは結構前ですが。ちなみに僕の持つてるのは初版です。で、読むのを忘れて放置していて、今に至るというわけです。

劇場版の公開が決定していますね。公開は来年なので、しばらく待たないといけません。待ちきれない人は、ネットラジオでも聴いてみましょう。「音泉」というサイトで毎月十日と二十五日に配信されています。

でまあこの本の話ですが、以前にこれの？巻を紹介したことがあります。それと同じで、アニメの内容のダイジェスト+オリジナルストーリーって感じです。第七〜十二話をノベライズしていますが、エピソードによっては相当端折られているのもあります。その分オリジナルが書かれているので、意味のあることなのですが。オリジナルの話とは例えば、第九話でのミーナと坂本のキスの後の話とか、マルセイユのサインの行く末とかです。

シリアスな話もコメディチックな話もありましたが、すべての話に共通することがひとつあります。ストライクウィッチーズの11人が、本当に仲がいいことです。どんな状況であっても信じ合い、助け合う。思いやって支え合う。そんな心遣いが行動や仕草の一つ

一つから読みとることができます。だからこそ、ドラマに深みが出るというものでしょうね。本当に、すばらしいアニメ、そしてノベライズだと思います。

## その88「Aチャンネル 第一、二巻」

現在アニメ放送中の原作で、萌え四コマです。「Aチャンネル 第一、二巻」(黒田bb/芳文社 一巻初版:2010年1月10日)

萌え四コマにありがちなお話。女子高生の日常を描いてます。天然っ娘のるん、るんが大好きな暴力的ちびっ娘のトオル、幸薄い関西系のユー子、そして突っ込み系メガネのナギの四人が中心人物です。

えっと、絵が好きです。表紙のトオルに惚れて買いました。というわけで好きなキャラはトオルです。なんというか、貧乳がいいですね。じゃなくて、ショートヘアで金属バット持っている。喋り方がちよつと乱暴で暴れん坊、でも基本的に優しいって、僕の好みどストライクです。なんというか、男の子っぽいところがいいですね。基本はシヨタか。

ギャグは、他のとあまり変わらないレベルです。基本的に薬にも毒にもならないような本ですが、これってそういう本じゃないんですから。表紙を見て、トオルかわいって思った人は買って損はない、ということでしょうか。

## その89「はたらく魔王さま! 第二巻」

第17回電撃小説大賞の銀賞受賞作の第二巻です。「はたらく魔王さま! 第二巻」(我々原聡司/アスキー・メディアワークス 初版発行:2011年6月10日)

新キャラが何人か出てきています。特に注目すべきは魔王の隣に引越してきた美少女……ではなく、魔王城の三人目の住民、悪魔大元帥ルシフェルこと漆原半蔵くんです。なかなかかわいい外見をしていますよこの子。ひきこもりで、ネットで魔王をサポートするって立ち位置もすばらしい。

第一巻から美形の主夫キャラが出ている時点でだいたいわかることですが、もしこの作品がアニメ化などでメジャータイトルになったあかつきには、きっと腐でBLな薄い本が大量に出るものと予想されます。最近の電撃文庫では、「デユラララ!」がそういう立ち位置の作品でした。

まあ腐な話は置いといて。多くの人は隣人の美少女の方が気になることでしょう。話は魔王達の部屋の隣に着物美少女が引越してきたことから始まるわけです。彼女は近所づきあいという名目で家計の厳しい魔王家に度々食糧援助をするのですが、それもなにか裏があるのではないかと魔王や勇者が疑念を持つとか、そういう話です。

マグロナルドとかセンタツキーフライドチキンとか、次から次へと飛び出るパロディの会社名にはそろそろ食傷気味になりましたが、それ以外の点は良い作品でした。

この作品のいいところは、各キャラの主張がはっきりしていて、それが立場や状況、あるいは他のキャラとの絡みによってどう行動することになるのかが決定的、その流れが上手い点だと思います。キャラの行動に、強引な所がないんですね。

とまあ、そんな感じのおもしろい本でしたよ。

## その90「魔法少女まどか マギカ 第三巻」

そろそろブームも一段落したところでしょうか。僕はアニメは観てませんでしたが、やっぱり続きや展開は気になるもので、最終回の放送が延期になったりした時にはやきもきしたものでした。放送されない限りはコミカライズも発売されませんから。ま、無事出たのでいいんですが。「魔法少女まどか マギカ 第三巻」(作画：八ノカゲ 芳文社 初版発行：2011年6月14日)

アニメを見ていないのでコミカライズの忠実度を実測することはできませんが、諸々の情報を見るに、アニメのストーリーを完全になぞっているようです。

第三巻でも、過酷で鬱なストーリーは継続されます。いったいこの調子で、どうやって物語に幕を下ろすのか、それだけが気になってました。まあ、ちゃんとしっかりまとめあるのですが。なんかいきなりスケールの大きな話になってましたね。これはこれでいいんですが。

うーむ、あんまり書くことはありません。あまりに有名すぎますから。

あ、そうだ。どうでもいいことですが、この話なんとなく「仮面ライダー龍騎」に似てるんじゃないかなーって思います。真司がほむらで蓮がさやかで、須藤はもちろんマミさん。まどかはたぶん優衣で、杏子が浅倉でしょう。すいません、ただ言ってみただけです。でも龍騎はおもしろいので、興味が沸いたら観てみてください。

## その91「エアリエル 第一〜三巻」

僕は、アクション映画が好きです。特に筋肉質のお兄さんの格闘が好きなのですが、それ以外にも銃撃戦やカーアクションなども好きです。ところが、ファンタジー要素のないアクション小説って、あんまりないんですよね。でもこれは、そんな少ない作品のひとつです。「エアリエル 第一〜三巻」(上野遊ノアスキー・メディアワークス 一巻初版：2010年6月10日)

物語の舞台は、とある大陸の南に位置する王国、ストーリーリア。ここでは反政府勢力「レヴァンテ」が各地で抵抗活動を行っていた。ある日、カメラマン志望の少年カシマ・マコトは政府軍とレヴァンテの戦闘に巻き込まれ、レヴァンテの戦闘機に命を助けられる。その戦闘機のパイロットはマコトとおなじ十七歳の少女だった。そのまま成り行きでレヴァンテの活動に参加することになったマコトは、その少女との共同生活を始めることになる。

ヒロインのパイロットは、車椅子少女で自力で歩くこともできず、空を飛ぶことが自己を表現する数少ない方法、そんな女の子です。ある意味で心を閉ざしたヒロインで、主人公との交流が主なテーマです。ラブコメですね。しかし注目すべきはそこじゃないです。アクションですよアクション。

メインは飛行機を使った空中戦ですが、軍用車両を使ったカーチエイスや、海賊に占拠された船の中でダイ・ハードするなど、燃える展開が多いです。

正直、第一巻の時点ではそこまでおもしろくもなかったのですが、二巻の後半から好きな展開が続いて、満足しました。

不満点を挙げるとするならば、「人が死なない」ことでしょうか。爆発や発砲の多い作品にも関わらず、人が死ぬ描写が一切ありません。一切ないんです。それが、なんとなく緊張感を削いでるかなとは思いますが。基本的におもしろい作品なので、そこだけが残念でした。

同じ電撃文庫では、似たような作品に「アリソン」のシリーズがあります。こっちはラブコメ要素が少なく、アクションに特化した大変おもしろい作品です。是非読んでみてください。

## その92「涼宮ハルヒの驚愕 上・下」

発売から一カ月経ったので、そろそろ書評書きましようかね。「涼宮ハルヒの驚愕 上・下」（谷川流／角川書房 初版発行：2011年5月25日）

涼宮ハルヒの憂鬱といえば、第八回スニーカー大賞の大賞受賞作で、現在のところ既刊十一巻の総刊数は約八百部という超ビッグタイトルです。小説、アニメ化作品とも完成度が高く、一大ブームを引き起こしました。かくいう僕も、初めて読んだライトノベルがこれでした。

たぶんライトノベルというジャンルでは最も有名な作品でしょう。しかし第九巻、涼宮ハルヒの分裂の発売から、実に四年間新刊が出ていないという状況にありました。それだけ時間が開くと人気も薄れ、オワコン（終わったコンテンツ）扱いされていました。そんな中で今日から一か月前、満を持して新刊が発売されたわけです。上下巻で合計六百ページ越えというボリュームですよ。そして発売日に買いましたよ。

「分裂」の時点で、なぜか世界が二つに分裂する（読んでない人にはさっぱりなことでしょうけど、本当に分裂しています）という

展開で、どうやって続けるのであろうかというのが非常に気になっていたのですが、そこは見事にうまくまとめていました、ただ時間が開いただけの正統な続編でしたね。

そしてお詫びの意味もあるのか、今まで出てきたサブキャラ的な登場人物が出てきたり、話題に上がったりしました。一種のファンサービスのな。まあ、今までもそういう書かれ方、書き方はあった作品でしたし、どこまでがどういう意図で書かれたのかなんてのはわからないんですけどね。

それにしても、この作品の人気はすばらしいものです。この巻の初版発行部数は、実に五一万三千部。ライトノベル史上最多です。まさにビッグタイトルですね。このサイトの利用者にもファンは多いのではないでしょうか。

### その93「天然あるみにゅーむ！ 第三巻」

どうでもいいですけど、アルミニウムってすばらしいですよね。強さとしなやかさを兼ね備えた金属としての性質も、その絶妙な重さも光沢もいいです。なにより、「アルミ」っていう名前の、他の金属にはない優しさや柔らかさが、たまりません。最高です。

アルミってすばらしいということですけど、主人公の名前が「あるみ」ってのも、同じぐらい素晴らしい……って、前にも同じことを言ってた気もしますが。「天然あるみにゅーむ！ 第三巻」（こむそう／芳文社 初版出版：2011年5月12日）田舎住みの天然で元気な女子高生の橘あるみとそのお友達を送る、ハイテンションでちょっと百合な日常が描かれています。暴走ぶりの分、ギャグセンスはちょっと高めです。そしてサービスシーンも多めです。

日常を描くだけの四コマなので、言うことがあんまりないですが、おもしろい本だとおもいますよ。そしてあるみがかわいいです。

## その94「マンガでわかる心療内科 第三巻」

マンガで心の病気をわかりやすく解説する、えっと、ギャグマンガの第三巻です。「マンガでわかる心療内科 第三巻」（原作：ゆうきゆう 作画：ソウ 少年画報社 初版発行：2011年5月23日）

今回解説する心の病気は、ED、新型うつ病、フェティシズムなど。変わったものだったら、「浦島太郎はなぜ老人になったのか」とかもあります。

この巻では、新しい登場人物が大勢出てきました。全員がこのマンガのヒロイン（？）である官越あすなさんの家族の方ですけど。表紙も、官越家の次女、ひめるさんです。この人、官越家の姉妹の中では一番好きです。やっぱショートの女の子っていいですね。

まあ、誰が萌えかについての話は置いておいて、このマンガは笑いとちよつとのエロ（この本自体はちゃんと全年齢対象ですよ）で心療内科のお話をしっかり学べるすぐれものです。ギャグのテンポも良くて、レベルも高くて。いい感じにぶっ飛んだ内容でしたよ。

## その95「魔法少女おりこ マギカ 全二巻」

人気アニメ魔法少女まどか マギカの、えっと、スピンアウト作品です。スピンアウトというのはスピンオフとは違うものなのか、どう違うのかについてはよくわかりませんが、この作品に関して言えば、暁美ほむらが繰り返した時間軸のひとつの物語を描いてる、ということでしょう。

そういうわけで、ほむらをはじめとしてマミさんや杏子といったおなじみのキャラが登場します。もちろんまどかやさやかも。ところがタイトルにある通りこの物語の主人公は「おりこ」さんです。オリジナルキャラクターですね。どんな人でしょうか。第一巻の表紙を見ると、緑色の髪のかわいらしい少女がいますね。この子がおりこでしょうか。実は違います。彼女の名前はゆまっというらしいです。じゃあ誰だよ、おりこって。

主人公の美国織莉子はちゃんと冒頭に登場しているのですが、第一巻では冒頭と後半に少し出てきただけで、しかもちゃんと説明のされない（謎を残す伏線的な）登場の仕方だったために主人公というよりは黒幕の印象を読者に与えています。そのストーリーの絡まなさは、アニメのまどかの比でありませんよ。なにしろ第一巻は杏子とゆまの話、あとマミと謎の魔法少女の戦いがメインのストーリーなので。おりこさんほとんど出てきません。主人公しっかりしなさい。

とまあ、こんなこと書いてると批判しているようにしか見えないでしょうが、話自体はおもしろいと思います。第二巻では主人公もちゃんと出てますし、謎もすべて明かされます。ほむらが繰り返した時間軸ということは悲劇的な結末になるわけですが、まあ、その話もいいと思いました。

絵柄については意見が分かれるようです。僕は、そこまで好きになれませんでした。いくつか好きなコマはあるんですけどね。そこが残念でした、絵柄ってやっぱり重要ですね。

## その96「新訳 ドリトル先生アフリカへ行く」

今回は児童文学の名作を紹介しますよ。「新訳 ドリトル先生アフリカへ行く」(作：ヒュー・ロフティング 訳：河合祥一郎/角川書店 初版発行：2011年5月30日)

新訳ということはもちろん旧約があるということですが、それよりも前に原著のことを紹介しましょうか。

ジョン・ドリトルという動物の言葉を理解し、話すことのできる動物の医者のお話です。動物が大好きなドリトル先生は、その性格が災いして獣医としての仕事は上手くいかず、いつも家系は火の車だけどドリトル先生といっしょに住む動物たちのおかげで、先生は楽しく過ごすことができた。

そんなドリトル先生が、動物たちと冒険に出かけたりするのが話の主な筋です。ドリトル先生の行く先々で、さまざまな動物が協力してくれて困難を打ち破る、と。

192年に第一巻が発行され、世界中で親しまれてきました。日本では岩波少年文庫で出版されているのが有名です。訳者は、文学者の井伏鱒二。「山椒魚」「黒い雨」などの名作を書いた方です。僕も幼いころに読んで、楽しんだ記憶があります。今となっては内容をほとんど覚えていないのですが。それで新訳が出たと聞いて懐かしさから買ったのがこの本です。角川書店の児童書レーベルで出版された本です。

なにしろ内容を覚えてないものですから、読むこと読むことすべ  
てが新鮮で、でもところどころ思いだす部分もあって。そういう感  
覚つてのはなかなか味わえるものではありませんね。

覚えてるところと言えば、子供の頃好きだった登場動物に、「オ  
シツオサレツ」というのがあります。頭のふたつある鹿で、もちろ  
ん架空の動物ですが、これの名前は原著では“Pushmi-Pu  
ll y u (Push me - pull you)”という  
名前です。それを「オシツオサレツ」と訳すあたりが、井伏鱒二の  
文豪としての上手さでしょう。この動物のことをこの本では「ボク  
コチキミアチ」と訳されていました。どちらの訳がより優れている  
かの議論は置いておくとして、ここが「新訳」であると強く感じさ  
せられた箇所です。

話は、ご都合主義的な場面はあるものの、これは子ども向けファ  
ンタジーでありそういうのに突っ込みを入れるのは野暮というもの。  
行く先々で動物に慕われるドリトル先生の人物像からは、深い慈し  
みと博愛精神が感じられます。子供のころに読んでおきたい本です。

なんというか、もっと言いたいことはたくさんあるのですが、近  
々続刊も出るとのことなので、残りの語りは次の機会にということ

で

## その97「HEROMAN 第4巻」

主人公かわいいという理由で好きになったロボットアニメのコミカライズ第四巻です。「HEROMAN 第4巻」(原作：スタン・リー 作画：太田多門 / スクエア・エニックス 初版発行：2011年6月22日)

アニメの内容をかけ足で漫画化した感じです。この巻で、ヒーローマンによる復興作業からDr. ミナミとの対決の終りまで描きます。ホリーとエージェントヒューズの登場や、リナとジョーイのデートも政府機関との逃避行もこの一冊入ってます。ちよつと詰め込みすぎじゃないか？ スピード感があるといえば、そうなのですが。

ヒーローものに特有の、悪と戦う熱い展開はアニメの質を失わずそのままです。だからコミカライズとしては上出来なのかも。

そんなことよりジョーイくんかわいいです。アニメでもかわいいですが、漫画でもかわいいです。ホリーよりリナよりもかわいいです。ジョーイマジ天使。そしてヒーロー。この作品のメインヒロインですよ。女装回もぜひともしっかり漫画化してほしいところです。ちなみにこの巻では水着姿やシャワーを浴びてるシーンが挿れますよ。それと、おまけページでラフ画でジョーイくんが女装します。アニメで見せてくれた服じゃなくてナース服！ ナース服！大事な事なので二回言いました。皆さん、是非買ってジョーイくんを愛でましよう。

## その98「Aチャンネル アンソロジーコミック 第一巻」

アニメ化した作品のアンソロジーを出すつてのは、芳文社の方針なんでしょうか。まあいいですけどね。「Aチャンネル アンソロジーコミック 第一巻」(芳文社 初版発行：2011年7月12日)

こういう本って、どういう人に需要があるんでしょうね。いえ、買った僕が言うのも変ですが。でも、やっぱり作者が描くトオルが一番かわいいと、僕は思ってますよね。

他の人が描くトオルがどんなものかは気になるところですが。なるほど。そつれが楽しみなんでしょうね。納得。

アンソロジーものは感想が書きにくいものですが、思ったことを書きましょう。るんのパンツはいてないネタが多かった。やっぱりみなさん気になるんでしょうね。

個人的に、こむそうさんの描いたのが好きでした。「天然あるみにゅーむ」の人ですね。やっぱり絵が好きなのでしょうね。そして、やっぱり入れてきた源蔵さんネタ。よく考えればこむそうさんが好きそうなネタですからね。

## その99「学園キノ 第五巻」

今年もやってきましたよ。年に一度の学園キノの発売。この作者、シリーズを三つ掛け持ちしていてそれぞれ年一回ペースで出してるものですから、毎年待ち遠しいっただらありやしない。おもしろいからいいんですけどね。

というわけで、「学園キノ 第五巻」（時雨沢恵一／アスキー・メディアワークス 初版発行：2011年7月10日）

キノの旅とはまったく関係のないギャグ小説です。今回は長編ひとつと掌編がひとつ。タイトルはそれぞれ、「もし高校野球の女子マネージャーが茶子先生の『すぐやる部』を呼んだら」と「かなりピンぼけ」です。どちらも有名な本のパロディですね。前者は説明する必要もないでしょう。去年最もよく売れた本です。後者は、戦場力メラマンローバート・キャパ氏の自伝ですね。

メインの高校野球云々ってのは、木乃たちの所属するすぐやる部が野球の試合をするっていう内容です。まあ、ギャグ小説ですから普通に野球をするわけではありませんが。ちゃんと野球を知らない知らない人でも楽しめるようになっていきますよ。

ギャグのレベルは上がっている気がしました。三、四巻はいまいちだったのが、この巻では楽しめました。なんというか、パロディのわかりやすさをおもしろみの質が上がってるんでしょうね。パロディが多いのはすべての巻で同じですが。

個人的にうれしかったのは、前巻で登場した沙羅とエリ阿斯がレギュラー化したことでしょうか。この初々しいカップル、好きです。そしてエリ阿斯くんかわいいです。かわいいけどいざという時頼りになる、彼女持ちのシヨタとか最強じゃないですか。エリ阿斯くん最高！ ということで、お勧めの本ですよ。

## その100「MM9」

僕は、特撮が好きです。仮面ライダーとかスーパー戦隊とか。あとウルトラマンとか。ゴジラとかガメラとか。

上に挙げた五作品の内、仮面ライダーとスーパー戦隊は今もテレビで絶賛放送中ですが、ウルトラマンは年に一度ほど映画がつくれるだけ。ゴジラとガメラについては物語はとうの昔に完結して、新作の話なんてまったく聞きません。

せめてウルトラマンぐらいは、新作のテレビ番組をそろそろ作ってほしいところですが、そうもいかない事情があるんでしょうか。

巨大なヒーローなり怪獣なりが暴れる映像っていうのは、周りの風景をミニチュアで作って撮らなければいけません。これがけっこう大変らしいですね。毎週作るのだとしたら、その苦労はいかほどのものでしょう。

巨大怪獣ものが衰退したのは、そういう背景があるのかもしれない。

しかし、巨大怪獣ってのはやっぱりカッコいいものですよ。圧倒的な質量で迫ってくるモンスター、それに対抗する人間とスーパーヒーロー。いいじゃないですか。男の子のハートをつかむのには、やっぱりそういうスケールがほしいところです。

というわけで今回の本。「MM9」（山本弘／東京創元社 初版  
発行：2010年6月25日）ももとはミステリーズという雑誌

に隔月で連載されていて、2007年に単行本として出版されてものです。ドラマ化に合わせて文庫化してんですね。

作者の山本弘は、SF小説家ですが、どちらかというと「と学会」の会長としての方が有名な気がします。と学会というのは、骨董無形な内容の本などを見て、読んで笑うっていう人達の集まりです。これだけだったらなにを言ってるのかわからないでしょうから、気になる人は一度調べてみることをお勧めしますよ。

で、これはそんな会長さんの書いた「怪獣小説」です。

地震や台風などの自然災害の一種として「怪獣災害」が存在する世界が舞台です。現代の日本ではありますが、年に何度か怪獣が現れて人間に被害を与える。残念ながら光の巨人はこの世界には存在せず、人類は自力で怪獣に対処しなければならない。

その怪獣に対処する機関が、気象庁内のひとつの部署、「特異生物大作本部」略して「気特対」である。怪獣の出現を予測、正体の特定や撃退方法を見極め、自衛隊に指示を出す、怪獣対策のスペシャリスト達。彼らの活躍を描いた本格怪獣小説です。

これが、ものすごくおもしろいです。未知の怪獣に対して優れた技術と見事なチームワークで難局を乗り越えていく。このメンバーは怪獣に向かって銃のひとつも撃ちませんが、立派に戦うヒーロー

なんだと思いました。

ところで、怪獣が実際にいるという設定で話を書くと、「この怪獣が実際に存在すると想定して計算するとこんな姿になっていないければならない!」とかぬかす、空想科学読本の柳田理科男さんが出てきそうなものですが、やはりと学会会長はすばらしいです。実際の物理法則では存在不可能な怪獣がなぜ存在できるのかという疑問に対して、見事な論理を出して良質なSF展開に昇華させていますよ。「こんなの不可能だ!」って言うだけでおしまいにはしないのはさすがです。

そして特撮ファンでもある会長は、話の随所に特撮ファンをニヤリとさせる演出を用意していたりします。しかもそれらが伏線として機能しているのですから、この人の技量には驚くばかりです。

読んで絶対に損はない小説です。自信を持って、そう断言できます。

## その100「MM9」（後書き）

こんにちは。そららです。

そららの読書日記、1〜100までで一度区切りとします。連載しているのが200まで達したら、また同じようにまとめる予定です。

この書評をまとめる作業の中で、今まで書いたものをざっと見なおしました。中には、書いた内容をすっかり忘れていたものもありました。ですが、その時思ったことを素直に書いているということは何の感想においても同じでした。これから、このやり方は変えていきます。

そしてこれを読んだ読者の皆様に、「あ、こんな本があるんだ」とか「ちよつと読んでみたいかも」とか、そんなことを思っていただけることがあれば、こんなにうれしいことはありません。

では、これからも応援よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9883u/>

---

そららの読書日記 第一集

2011年10月4日17時15分発行